

# アメリカ大陸横断旅行

～バックパッカー一人旅～

みんなと出会えて良かった

＼(^o^)／

ボギー 佐藤

## はじめに

---

2011年3月11日

この日は我々日本人にとって永遠に忘れることのできない、そして、決して忘れてはならない日となった。未曾有の大地震と津波。更に、福島原発の放射能漏れ。かつてこれほど悲惨な災害があっただろうか。死者・行方不明者は1万8千人を超える。

この出来事は人生観を変えた。「人生やれる時にやっておかなければ」と思い始めた。人生の幕を下ろす時、「あの時やっておけば...」との思いだけはしたくない。

そこで、残された人生でやりたいことを整理して、『バケットリスト』を作成した。

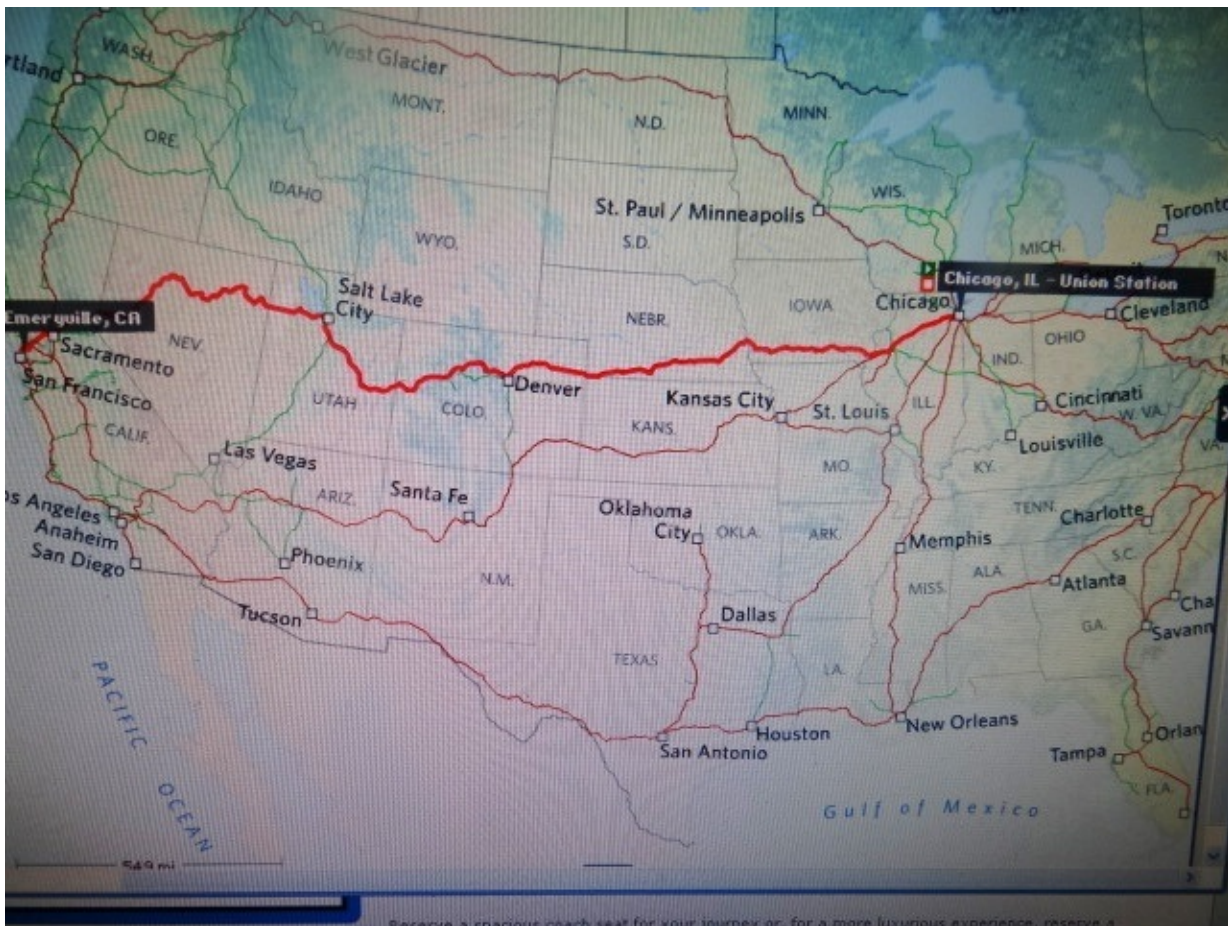
(『バケットリスト』とは「人生でやり残したことをリストにし、それを人生の目標とするもの」バケットとは「棺桶」のこと。映画『最高の人生の見つけ方』(原題: The Bucket List)が参考になる。必見。)

そのリストの1項目『バックパッカーとして海外を旅行する』を実行することにした。海外での人との出会いを通し、改めて「自分」を問い直そうと思った。

幸いにも学生時代の友人がニューヨーク(NY)に在住していて、近々転勤になるので、その前に遊びに来ないかという。「よし、行くか!」しかし、何か刺激的な旅はできないものか。

「そうだ! 列車でアメリカ大陸を横断してみるか」

「英語を話せるかって?」そういえば、30年前に数年間英会話に打ち込んだ時期があったが、それがどれ程頭と耳に残っているか...。まあ、それはどうにかなるさ。行ってから考えよう。



ということで、サンフランシスコで1日観光して、そこからシカゴまではカリフォルニア・ゼファ  
ー号で行き、シカゴ バッファロ(ナイアガラの滝) NY は飛行機を利用することにした。

※1 California Zephyr ; 米国最大の鉄道会社Amtrak社が運行する人気のある長距離列車。

サンフランシスコ ⇄ シカゴ間(約3,920 km)を約52時間(2泊3日)で結ぶ。

個室寝台(2ベッド)食事7回付の料金は約35,000円(430ドル=乗車券152ドル+寝台券278ドル)  
(1\$=80円 換算 本編ではすべてこの当時の実勢レートを適用)

Zephyrとはギリシャ神話に登場する西風の神。

※2 料金はシーズンや出発日によりかなり変動するので要注意。

因みに2013年8月1日(木)出発の料金は約61,000円(\$763)で約26,000円(\$333)も割高。

\*\*\*\*\*

当初、全行程を列車による横断を考えたのだが、シカゴからNY方面は「列車の料金が割高」「  
時間がかかる」「体力的に厳しい」等の理由で飛行機に変えた。

宿泊はシスコで1泊、ナイアガラで2泊、NYでは友人宅に4泊、その後、NYのホステルの相部  
屋で5泊、最終日にホテルで1泊する計画だ。

(ホステルは交流を目的に6人部屋を予約。ちょっと無謀だったかなあ(.\_))

17日間という長旅だが、プラン通り行くだろうか。不安もあるがとにかく、出発しよう。

※これから列車でのアメリカ旅行を考えている方は、[AMTRAK社のHP](#)を一読(できれば熟読)されることをお勧めします。様々な情報(チケットの予約・購入、周遊券、食事のメニュー等)が載っていて、非常に役立ちます。著者は十分に読まなかったので余分な苦勞をしました。(´Д` ;)

【今回の旅行プラン】

2012年

3/21(水) 15:50 成田空港 発



21(水) 9:25 サンフランシスコ空港(SFO)着

↓ 電車(BART)

アルカトラズ島観光

↓ ケーブルカー

「ホテル モッサー」(1泊)

22(木) 9:10 サンフランシスコ(エメルヴィル駅)発

↓ カリフォルニア・ゼファー号(2泊)

24(土) 15:50 シカゴ駅 着

↓ ブルーライン(地下鉄)

18:50 オヘア空港 発



21:20 バッファロー空港 着

↓ タクシー

「デイズ イン ナイアガラ」(1泊)

25(日) 終日 ナイアガラ観光

「ホテル オークス」(1泊)

26(月) ↓ バス

12:25 バッファロー空港 発



13:55 JFK空港 着

友人宅(4泊)

27(火) ニューヨーク観光(エンパイアステイトビル、MOMA、自由の女神

↓ メトロポリタンミュージアム、マンマミーア鑑賞 他)

30(金) ホステル「タイムズスクエア ゲストハウス」(5泊)



4/4(水)



ホテル(未定)(1泊)

5(木) 14:00 JFK空港 発



6(金) 16:45 成田空港 着

## 1. 出発日

3月21日(水) 快晴☀

朝6時に起床。身辺を整理し、持ち物の最終チェックをした。

航空券や列車の**バウチャー**等の重要書類は日程別に一冊のクリアファイルに集約した。

(**Voucher**:チケットへの交換証。ネットで代金を支払うと、支払先からメールで送られてきたバウチャーをプリントし、現地でチケットと交換する)

### 《参考》

各チケットの予約・購入はすべてネットで済ませた。(ホステルだけが現金払い)

#### ◆航空券

●日米往復(成田 サンフランシスコ / NY 成田).....「[HIS](#)」

●シカゴ ナイアガラ NY.....旅行サイト「[Expedia](#)」

#### ◆列車

Amtrak社のHPで予約・支払い。(後日、バウチャーが送られて来た)

#### ◆宿泊

●シスコ(1泊)とナイアガラ(2泊)のホテル.....旅行サイト「[Expedia](#)」

●NYでのホステル宿泊.....海外のホステル紹介サイト「[HOSTEL TIMES](#)」

宿泊料を直接ホテルのHPでも調べたが、「Expedia」の料金と変わらなかった。

荷物は両手が使えるように、バックパック(30ℓ)とウェストバックだけ。衣類は必要になれば旅先で買うことにして軽量化した。上はセーターにハーフコート、下は黒のデニム。靴は以前から愛用している歩き易いスポーティな革靴を選んだ。

自己防衛を目的としてもみ上げから顎にかけて髭を伸ばし、頭にはニットキャップをかぶり、旅慣れた(というか小汚い?)旅行者を演出した。

出発時間が来たのでパスポートを首から掛け、最後にYou Tubeで「[ロッキーのテーマ](#)」を聴き、モチベーションを高めて9時に家を出た。しかし、なぜかいよいよ海外一人旅だという気負いはなく、かといって不安感も無く妙に冷静だ。ひょっとして、これは緊張感の表れかも。

自宅のある横浜から電車を乗り継ぎ、順調に昼過ぎに成田空港に着く。

先ず、円をドルに交換しなければ。交換レートは**86.48円/ドル**。ぼったくりだ。しかし、交通費やホテル代はネットで決済済みなので、影響は少なくて済みそうだ。(列車の支払レートは78円だった)とりあえず3万円をドルに替えた。

昼食はしばらく日本食が食べられなくなると思い、空港内の寿司屋で握り鮓「お好み」(2000円)を食べた。これが思った以上に美味しい。店の名前は築地「寿司岩」。



その後、空港内の土産ショップで日米友好の国旗のピンバッジを買ってニットキャップに付けた(写真)。

実は、危険性の観点から自分が日本人であることを表に出すべきか迷ったのだが、偶然このバッジを見つけ、この程度であれば問題ないだろうと判断し付けた。予想外にこのバッジが様々な場面で好影響をもたらした。

フライトは**15:50発 DELTA618便**。シスコまでの所要時間**9時間35分**。順調に出国手続きも終え、搭乗ゲート21の待合室来到ると、そこは乗客で溢れていて座る席もない。仕方ないので少し離れた所で搭乗時間を待った。



搭乗ゲートが開き、機内に入り、右の翼が見える窓側の席に座り一息ついた。周りを見渡すと文字通り満席だが、なぜか僕の隣の席だけが空いている。

「後から来るのかな...」と思いつつガイドブックに目を通してしていると、30代のスーツを着た男性が近づいて来た。キャンセル待ちだったのだろうか。目が合ったので「どうぞ」と言うと、彼は躊躇し、座らずにそのまま後方に歩いて行った。「どうしたんだろう？」(・・?)

しばらくして、反対の窓側を見ると、彼はこちらに視線を送りながらCAと話をしている。「席を替えて欲しい」とでも言っているのだろうか。確かにニットキャップを被った髭面の男と10時間も一緒に居たくない気持ちは解るが.....。

結局、この席は空席のままだった。狭いエコノミー席なので隣が空席だと身動きも取れて快適だ。これも、想定外ではあるが「小汚い」旅人を演出した成果の一つとなった。

シートベルト装着のアナウンスが流れ、機体が動き出した。いよいよ「アメリカ大陸横断鉄道列車の旅」の幕が開ける。

## 2. アメリカ入国

3月21日(水) 快晴 🌞

飛行機は多少揺れたが(内心ヒヤヒヤ)順調なフライトだった。深夜、窓から見える星座がとても近くに感じられ綺麗な眺めだった。「あれは何座なのだろうか」としばらく星の世界に浸っているうちに眠りに入った。

窓の外が次第に明るくなり、10時間のフライトもフィナーレを迎える。窓の前方に白い雲や海の色とは異なる黒い大地が顔を出した。「アメリカ大陸だ！」機体がカリフォルニア州の海岸線を越え大陸を真下にした時(写真)、少なからず心が高揚した。



時差(15時間)により同日午前9時25分にサンフランシスコ空港(SFO)に着き、入国審査を受けた。

審査官 「アメリカは初めてか？」

僕 「Yes」

審査官 「滞在日数は？」

僕 「16 days」

審査官 「家族と一緒にか？」

僕 「alone」 (一人で)

すると、

審査官 「by yourself？」

と訊きなおした。

「ん？ by yourself...」 そうか僕のような一人旅は「by myself」って答えるのか。

審査官は「初めてのアメリカ旅行で16日間も滞在。しかも一人旅か。ふ～ん」という表情をしたが、僕の顔を見て「Enjoy yourself」と言った。「Thank you」と返し、気持ち良く入国審査を通過した。

空港の国際ターミナルから標識を頼りに、歩いて**バート(BART)**の始発駅に着いた。  
(**BART**;「**Bay Area Rapid Transit**」の略称で、空港とシスコ市街をつなぐ公営高速鉄道)

チケットを買おうと自販機に向かった。目的地の**Powell**駅までは**8.1ドル**。自販機の表示を読んでいると、隣でチケットを買い終わった男性が話しかけて来た。スーツをピシッと決め、胸には航空機のバッジを付けた、スマートでハンサムなシルバーグレイの男性だった。ケビン・コスナーを甘くした感じか。今まで彼ほど「カッコイイ」男性を見たことがなかった。

彼は「初めて使うの？」と物腰の柔らかい紳士的な口調で訊いてきた。  
「Yes. I will try it.」と答えると彼は「OK!」と言い、僕の様子を見守っていた。

僕は財布から紙幣を1枚取り出し、何ドル札か確認すると「伊藤博文」が目に入った。  
「Japanese Yen」とつぶやくと彼は「Oh!」と言って笑った。次に10ドル札を取り出し、紙幣挿入口に入れると、彼は急に説明をしながら金額のボタンを押し始めた。

「それ、僕がやりたいんだけど」と言う間もなく、彼は「このボタンを二度押すと金額が\$ 8.10になるんだよ」と言った後、発券ボタンまでも押した。僕は仕方なく、出て来たチケットを拾い、笑顔で「Thank you」と言った。

改札の通り方も教えてもらい、ホームに出た。10分位して列車が来ると、彼は乗り込みながら「Powell駅まではhalf an hourだ」と言い、「30 minutes」と付け加えた。「half an hour」だと僕が分からないと思っの親切心からだろう。乗車してすぐ彼は座り、僕は遠慮して少し離れた席に座って窓から景色を眺め、停車するたびに駅の名前を確認した。

幾つかの駅を過ぎ、目的地の**Powell**駅(**シスコ市街の中心にある駅**)に着いた。  
彼に別れとお礼の挨拶をしようと思ひ振り返ると、なんと彼は既に笑顔で大きく手を振っているではないか。なんともフレンドリーな人だ。僕もそれに応えて手を振り「Thank you!」と声をあげてバートから降りた。

そうだ、あの航空機のバッジは「**Air Force**」(米国空軍)のバッジだ。「なるほどカッコイイわけだ」(・・)?。短い時間だったけど、また話がしたいと思わせる、雰囲気のある魅力的な人だった。

彼が話しかけてきたのは、勿論親切心からだろうが、僕のキャップのバッジを見たこともその一因になっていると思う。国籍を明示し、日米友好のバッジだったので話かけ易かったのだと思う。

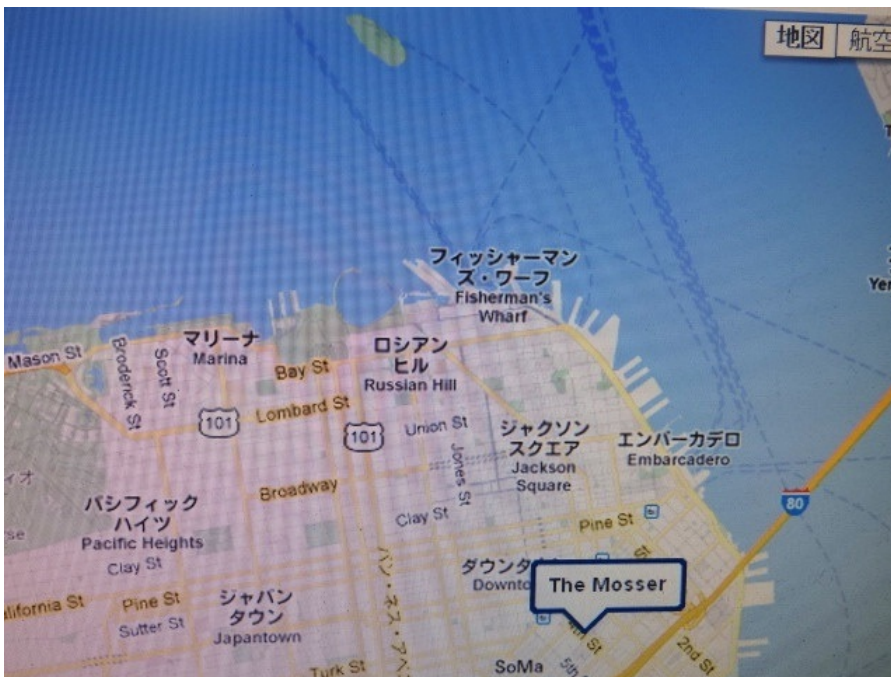
休む間もなく、Powell駅のすぐ側にある「**Visitors Information Center**」(観光案内所)に行き、日本人スタッフから色々な情報(観光地図等)やアドバイスを受けた。

その時、Amtrakの支店が近くにあると知り、明日予定していた列車のチケットを今日受け取ることにし、支店がある**ピア2**に向かった。

**\*ピア(Pire 埠頭。シスコ湾沿岸は埠頭が多く住所として使用されている)**

空は晴れて暖かい。Powell駅から東西に走っている「**Market street**」の両サイドは高層ビル街だ(写真下)。駅から東へ向かって30分ほど歩きシスコ湾の近くまで来た。随分汗をかいた。歩行者はみんな軽装だ。コートなんて着て来るんじゃない(´A` )。





道を尋ねながらAmtrak社の支店がある二階建てのビルに着いた。広い通りに面している正面入口から中に入ると、いきなり広い部屋だ。奥に立派な机に座っている一人のご婦人と目が合った。

キョトンとしていると彼女はニヤニヤしながら「Amtrakの入口は裏よ」と教えてくれた。「Thank you」と言って外に出て、改めてドアを見るとAmtrakの入口の場所が書かれた貼り紙があった。

「失敗、失敗」とつぶやきながら、裏に回りオフィスの中に入ると、カウンターには男女2人のスタッフが居て、客は2~3人だった。年配の黒人男性スタッフにバウチャーを渡し、列車と始発駅までのバスのチケットを発行して貰い、記念にオフィスの写真を撮り外に出た。



時間がなかったので昼食は取らず、「アルカトラス島」観光のフェリーが出港するピア33を目指し、湾に沿って北に向かった。

(アルカトラス島：シスコ市から2.4 kmに浮かぶ脱獄不可能と言われた刑務所がある小さな島。アル・カポネも収監されていた。1963年に閉所)

右方向にはサンフランシスコ湾が広がっているが、建物でよく見えない。しばらく歩くと、建物が途切れ、海に突き出した広場に来た。そこはフェリービルディングのあるピア1だった。(ピアの番号は基本的には南から北に向かって順番になっているが、かなりいい加減)

遠くにはシスコ市街と向かいのオークランドをつなぐ長い橋が架かっているのが見える。

(橋の正式名は「San Francisco-Oakland Bay Bridge」(通称「Bay Bridge」)。1936年に鉄道・道路併用として開通し、現在は道路専用橋。上下に道路が分かれていて、上デッキが西行き、下デッキが東行きで5車線ある)

絶景だ。絶好のシャッターチャンスだ。ピアの先頭に向かって歩いて行くと、ベンチがあったので、背中の荷物を降ろし、カメラを構えて5~6枚撮った。



カメラは買ったばかりで使い方も十分に知らない。でも、それは撮りながら覚えていけばいい。早速パノラマ写真を撮った。思ったより使い易い。10枚程撮ってまた目的地に向かった。

(カメラは[SONY「DSC-HX100V」](#)で光学倍率30倍が気に入って購入。今回、約1,000枚の写真を撮ったが手ブレが少なく、素人とは思えぬほどよく撮れていた(自画自賛))

### 3.サンフランシスコ（アルカトラズ島・ケーブルカー）

ピア33に着くと150人位の長い列が出来ていて、チケット売り場にも30人位並んでいる。ホットドッグ等の出店もある。島に上陸できるフェリーはここだけなのか、かなりの人気だ。

僕は既にネットでチケット代(\$26)は支払い済みなので、「will call」(チケット交換所)と表示された窓口に並んだ。バウチャーを渡すと若い黒人女性がチケットに何か書き込みながら喋っているが聞き取れない。一旦チケットを受け取り、歩きながら彼女が書き込んだ時刻を見てやっと理解できた。それは「乗船時間は出港時刻の25分前」ということだった。

暑いので乗船時間までは建物の陰で待っていたが、更に日差しが強くなり、僕は手に持っていたコートを強引にバックパックに押し込んだ。

フェリーは定刻2時45分に出港した。シスコのビル街や遠くにBay Bridgeが見える。近くにカモメも数多く飛んでいる。途中で港に戻るフェリーとすれ違った(写真)。フェリーは僅か10分ほどで島に着いた。



上陸後、スタッフの簡単な説明の後、刑務所の建物に向かって坂を登った。建物の中に入り日本語版ガイドス用ヘッドホン(無料)を受け取り、ガイドスに従い建物の中を歩いた(写真下)。

アルカトラズ島に関しては旅行の3日前に、『アルカトラズからの脱出』(主演:クリント・イーストウッド)を観たので予備知識はあったが、その映画の舞台に、今、自分が立っている実感が湧かなかった。(この島を舞台にした映画は他には『ザ・ロック』(主演:ニコラス・ケイジ)がある)



刑務所内をぐるぐると歩き回った後、疲れたので外に出た。そこは映画では囚人たちが休み時間を過ごす広場だった。シスコ湾に面していて遠くにビル街が見える。それを背景に記念写真を撮っている観光客も多い。



僕も写真を撮って貰おうかと、刑務所の建物のそばのベンチに一人腰掛けていた金髪で30歳くらいの美人でやさしそうな女性に声をかけた。

彼女は「えっ、私？」とちょっと驚いた表情で、戸惑いながら僕の後ろについて来た。彼女にカメラを渡すと、僕の意を察したのか急に笑顔になり、カメラのシャッターを押してくれた(写真左)。

実は彼女の驚いた表情から薄々気づいてただけで、

「Could you take my picture?」(写真を撮ってくださいませんか?)

と言うつもりが、実際は意に反して、

「Can I take the picture?」(写真を撮りましょうか?)と言ったのだった。(一一)

「Could you～」と「Can I～」が多少の緊張感と相まって、頭と口とが別々に動いたのだろう。恥をかいたが、そんなことを気にしてちゃ喋れない。2時間位で島を離れた。

(帰りはどのフェリーに乗っても自由。船は約30分毎に出航している)

港には4時過ぎに戻り、食事をしようとピア45にあるフィッシャーマンズワーフに向かった。

(Fisherman's Wharf : 漁師の波止場。魚介類の美味しいお店が集まっている)

Amtrakの支店から湾に沿って歩いて来たが、道は広く、起伏がなくとても歩き易い。景色も良いのでお薦めのウォーキングコースだと思う。

ピア45に着き、何を食べようか迷った挙句、屋台風の店でクラブのカクテル(カニの身をプラスチック容器に入れたもの。\$10)をオーダーした。



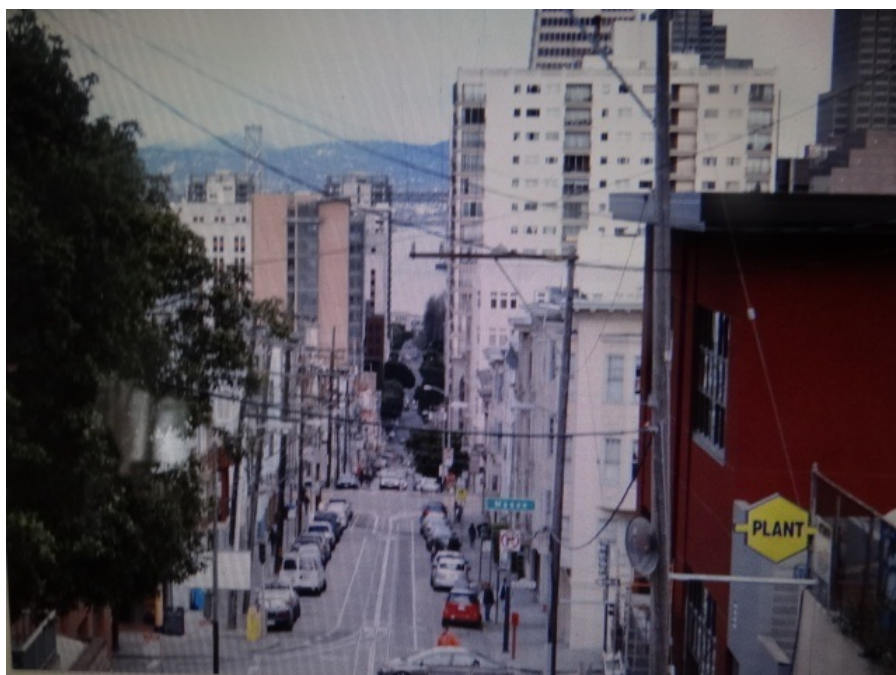
すぐに料理が出て来たが、正直まずい。しょっぱいだけでとても料理といえるものではなかった。ガッカリだ。ここは期待できないと思い、今夜宿泊予定のユニオンスクエア(市の中心地)で食事をすることにした。

せっかくなので、ホテルへは人気のあるケーブルカー(市が運営する世界最古のケーブルカー)に乗ろうと、道を訊きながら北部の発着駅「Hide」駅にたどり着いた。



早速チケットを購入し(\$6)、列に並んだ。既に客が50人以上並んでいる(写真上)。車両の座席数が30席と意外と少なく30分以上待って、やっと順番が来た。

先頭から順に席に座り、運悪くちょうど僕の前で満席になった(-\_-)。すると車掌が「次の人はサイドステップに乗ってくれ」と言ったので、右側ステップの先頭に立ち、左手でポールを掴み、右手でカメラを構えた。バックパックにして良かったと思った瞬間だ。



ホテル近くの終着駅Powell駅まで写真を撮り続けた(写真上:遠くにシスコ湾が見える)。

途中、駐車している車に足が接触しそうなほどギリギリでそのスリルを楽しんだ。運転手は鐘をカンカン鳴らし、邪魔な車に対し怒鳴っている。少なからずパフォーマンスも含まれているのだろう。

当初はさほど期待してなかったが、ケーブルカーは見た目よりスピード感があり、起伏が大きくとても爽快で楽しめた。サイドステップに乗れたおかげだと思う。路線は3つあるが、この「Hide-Powellライン」が景観を含め一押しとの評判だ。所要時間は25分。

ホテル「[The Mosser](#)」(7000円/泊)にチェックインした後、下着を買おうとフロントスタッフに店を訊くと、驚いたことに「cheap or expensive?」と訊いてきた。勿論、即座に「cheap」と答えた。するとすぐ近くに「[ROSS](#)」という店があるという。

ホテルを出ると、大きなネオンサイン「ROSS」が見えた。イオンのようなスーパーだ。2階に上がり、ランニングシャツ3枚1組\$16(1枚430円)をかごに入れ、2階にはレジがないので、1階に降りレジに行くとき長い列だ。随分待たされた。

夕食は街を歩いて探したが、美味そうな店が見つからない。興味本位で日本食の店を3店舗を覗いたがどこも満席だった。「どこでもいいや」と大衆的なタイ料理の店に入った。肉や野菜をピリ辛に炒めた惣菜3種類を選び、それをご飯にかけた丼料理と春巻きを注文した。丼は美味かったが、量が多く辛かったので完食できず、春巻きはテイクアウトにした。

接客係は30才位のタイ系アメリカ人?で、日本人に好感を持っているのか拙い日本語で話しかけてくる。最後に日本語で「私はウィルです」と自己紹介をしてきた。僕はシスコには一泊しかしないし、まだ、気持ちに余裕がなかったので特に彼とは積極的に話さなかった。ただ、人なつっこい男だった。

ホテルに帰る途中で小さなコンビニに寄り、缶ビールを2本買った。レジに行くとき30代の黒人男性のスタッフがニヤニヤして話しかけてきた。彼の後ろにはかなり酔っぱらった白人男性が腰かけていた。

彼「なぜ袋が要るの?」

からかっているのだろうか。

僕「荷物が3つあるが手が2つしかないから」

と答えると笑った。僕が日本人だと判ると、

彼「サムライか?」

僕「サムライではないがニンジャだ」

と言うと、また笑った。

ホテルの部屋に戻り、ビールで春巻きを完食した。シスコは夜10時頃までPowell駅の周辺を歩いたが、幸運にも、危険や不安を感じたことは一度もなかった。酔っ払いはいないし、見かける人の数も少ない。

今日は長く、そして刺激的な1日だった。アメリカに来て良かったと実感できた日だった。

今、深夜2時。気持ちが高まっているからか、なかなか寝付けない。というより眠たくないのだ。でも、明日は5時半起き。少しでも寝なくては...



## 4. 1 カリフォルニア・ゼファー号 (初 日)

3月22日(木) 晴れ ★

今日は最も楽しみにしていたカリフォルニア・ゼファー号でシカゴに向かう。

列車は午前9時10分に「エメルヴィル(Emeryville)駅」を発車し、シカゴ駅到着は2日後の午後2時50分で所要時間51時間20分。

エメルヴィル駅は「Bay Bridge」を渡ったところで、ホテル近くのバス停から所要時間約50分。バスのチケットは既に受け取っている。(バスの時刻表はAmtrak社のHPにある)

5時半に起き、シャワーを浴び、6時過ぎにホテルを出た。まだ暗い中、5分位でバス停に着いた。



バス停は「MKT & 4th」だが、名前の表示が見当たらない。隣に一人でバスを待っている中年のご婦人が居たので訊くことにした(偶然写真に写っていた)。

僕 「ここにAmtrakのバスが止まりますか？」

婦人「良く知らないけど向かいに止まっているバスがAmtrakのバスよ」と言って指差す。

確かにAmtrakのバスだ。車体にロゴマークが大きく描かれてる。

車は右側通行なので向こうのバス停かもしれない。予定時刻7時までには30分もあり、ちょっと早いとは思ったが行ってみることにした。

運転手は「つば」の広いしゃれた黒いハットをかぶった小柄な黒人。乗車口でチケットを見せるとそれをちぎり、「Get on!」と言うので乗ったが、心配なのでバスから降りて、

「出発時間は7時？」

「No! Now! Let's Go!」

と大声を上げたので思わず飛び乗った。後で分かったが、やはり30分早いバスだった。バスは他の停留所でも客を拾った後、ベイブリッジを渡りエメルヴィル駅に7時半前に着いた。

早朝のせいか乗客は少なく、売店でコーヒーと甘いパイを朝食代わりに食べた。5ドルだった。



構内を散策したり、日記を整理したりしていると、9時前にゼファー号がホームに入って来た。



列車は機関車を除き、10両で編成されている。

- 寝台車(Sleeper) 3 両
- 食堂車 (Dinning Car) 1 両
- 展望車 (Lounge) 1 両
- 客 車 (coach) 3 両
- 荷物車 (Baggage) 1 両
- 鉄道関係者の専用車両 1 両

車両の乗車口にいる車掌に乗車券を見せ、予約した車両を教えてもらい、僕は後ろから2両目の1階の個室(Roomette:ルーメット)13号室に乗り込んだ。

部屋は二人用で真ん中にテーブルがあり左右に椅子がある。寝る時はテーブルを収納し、椅子をスライドさせ平らにすると下のベッドができる。もう一つのベッドは頭上にあり、手前に引いて倒すだけ。

[★ベッドのセット方法(AmtrakのHP)]

向かいの部屋は年配のご夫婦で、ご主人はずっとパソコンに集中している。奥の部屋は家族用の4人用の個室だった。

間もなく、制服を着た体格の大きな黒人男性が来て、

「この寝台車の担当なのでよろしく」

「食事の時間はアナウンスがあるから」

「無料のコーヒーが2階にある」

等説明した後、僕がシカゴまで行くことを向かいのご夫婦に話してくれて、僕と握手を交わした。

残念ながら彼の名前を忘れたが、ここでは「John」と呼ぼう。

車内を見て回ろうと、2階の展望車に上がった。室内は青を基調としており、とてもゆったりとした椅子の配置で、窓も広く快適な空間だ(写真下)。

隣が食堂車で4人席のテーブルが左右両側にそれぞれ6台並んでいて、スタッフが4名(女性1名)隅に座っている。その先が一般車両で1階に降りるとに売店があり飲食類を販売している。



10時現在、一般席を覗くとガラガラだ。途中から乗り込んで来るのだろう。部屋に戻り景色を眺めているとアナウンスがあった。向かいのご夫人が、

「今、ランチをやってるよ」

と教えてくれた。僕が何度か聞き返すと、

夫人「あなた普段何語を話すの？」

僕「Japanese」

夫人「私はドイツ系だから(私の英語は聞き取りにくいかも)ね」

と笑った。彼女はドイツ系アメリカ人とのこと。気品のある、優しそうな女性だった。

1時過ぎに食堂車に行くと、60代の白人男性3人が座っているテーブルに案内された。

彼らは友人同士で既にリタイアされていて、これからサクラメントに帰ると言う。外人3人に(外人は僕だが)囲まれて食事をするという経験は生まれて初めてだったけど、別に緊張はしなかった。ただ、僕がいることで彼らの会話の雰囲気壊したくないという気持ちだった。

様子を窺いながら、会話に参加するタイミングを計っていたら彼らの方から話しかけてきた。

僕「今回が初めてのアメリカの旅行で、これからシカゴ経由でナイアガラ見物をした後、NYの友達に会いに行くんです」

と言うと、皆さん一様に「へえ」という表情した。

(鉄道旅行というと大抵驚く。鉄道旅行は時間があり、贅沢な旅というイメージがあるようだ)

僕はあまり話をすることもなく、気を使わせては申し訳ないと思い、食事を終え、「Thank you for talking」と言って席を後にし、そのまま展望車に向かった。

展望車は空席が少なく、どこに座ろうかと迷っていると、隣の女性が「ここが空いているわ」と隣の席を勧めてくれた。彼女と簡単な会話を交わし、風景の写真を撮っていると、彼女が話しかけて来た。

彼女「あなたの写真を撮ってあげる」

僕「Thank you」

彼女にカメラを渡し、一枚撮って貰った。

僕 「写真撮ってもいい？」

彼女 「撮らないで。彼と一緒にだから」  
と隣の男性を見た。

彼女 「face bookに載せられたら困る」  
と笑った。

僕は「そうか。そういうことか」と納得した。

「今、高度6225フィート(1898m)だ」と後ろに座って高度計(i phone)を見ている男性が話しているのが聞こえ、[シエラネバダ山脈](#)を越えようとしていることを知った。窓の景色も雪景色に変わってきた。(この路線の最高地点は2,613m)

携帯に日記を付けていたら、突然、素晴らしい湖が目に入った(写真下)。あまりに美しいので彼女に湖の名前を訊くと「[ドナー湖](#)と言ってとても有名よ」と教えてくれた。湖のほとりには百軒くらい戸建てのペンションが建っている。



([ドナー湖](#)はカルフォルニア州の東部に位置する湖。かつて西部開拓史時代にドナー隊という開拓民のグループの多くの人々が雪の中で餓死するという悲劇があったという)

しばらくして、車内にアナウンスが流れると、「今、[ネバダ州](#)に入ったわ」と、彼女が僕の腕をつついて教えてくれた。

そろそろ夕食なので一度部屋に戻った。部屋のドアを開けると荷物が無い。「参った」「でも、まさかそんなことはないだろう」と思いながら探したが、見つからない。向かいの部屋は荷物はあるが誰もいない。仕方なく、食堂車に行き食堂の責任者に話して、一緒に部屋に戻った。

すると荷物があるではないか。そう、隣の車両の同じ番号の部屋と間違えたのだ。やってしまった。「Very sorry」と繰り返し謝ったが、果たして気持ちが伝わっただろうか？ 少なくとも、今日は食後のチップを多めに渡さなきゃいけないだろうなあ。

夕食を食べに食堂車に行った。今度案内された席には、60代のご夫婦(と思われる)が座っていた。「Hello!」と言って向かいの席に座わり、メニューを見ているとすぐにオーダーを取りに来たので、サーロインステーキとマッシュポテトを頼んだ。

まもなく、4人目のお客が僕の隣に座った。彼は太目で良くしゃべる40代の白人男性だった。彼は向かいのご夫婦と一通り喋った後、僕に話しかけて来た。

彼 「君は展望車に居たよね。僕も居たんだ。君は中国から？」

僕 「日本から」

彼 「そう。実は僕の兄弟が何年か日本で勉強して…」

彼は暫くしゃべったが、良く聞き取れず、あまり会話が弾まなかった。後で思い出したのだが、彼は展望室で高度計

を見ていた男性だった。

周りを見ると、みんなサーロインステーキをコーラや水を飲みながら食べているので、  
「日本人はコーラで食事はしませんね」  
と言うと、向かいのご夫人に  
「私はサキ(酒)を飲みながら食事はしないわ」  
と笑顔で返された。  
しかし、その後、アメリカで食事をしているうちに、僕もコーラで食事をするようになった。

窓からはネバダ州の広大な砂漠のような、無人の荒野が広がっている。確かに夕陽は綺麗なのだが、誰もいない荒野を見渡すと、逆に不気味とも言える光景だった(写真:下)。



僕 「誰もここに住まないのは気候のせい？」  
夫人 「そう気候だと思う。ここは冬は寒く、夏暑く、水が無いから」

食事を終え、チップを普段より多く5ドル置いて部屋に戻った。  
(以前、向かいの部屋の夫人にチップの額を尋ねたところ、朝食とランチは2ドルで夕食は2ドル以上との回答だった)

部屋に戻り、携帯電話を充電器にセットすると疲れと睡眠不足とで急に眠気に襲われ、座ったまま眠りに落ちた。

## 4. 2 カリフォルニア・ゼファー号 (二日目)

---

3月23日(金) 晴れ 🌞

朝早く目が覚めたので、シャワールームで汗を流し、ヒゲを剃りさっぱりした。毎回、初対面の人と食事をするので、身だしなみは大切だ。

7時半過ぎ、食堂車に行くともまだ誰もいないテーブルに案内された。すぐに40才過ぎと思われる真面目そうな白人男性が正面に座り、僕より先に注文を済ませた。食事は基本的にメニューの中から選ぶ(料金は列車代に含まれている。但し、飲み物は別料金)。

注文を取りに来た女性が色々と訊いてくるが、内容を聞き取れずに苦労した。というか、料理のイメージが湧かないのだ。要は、肉はビーフかチキンかポークか、サラダはグリーンサラダかポテトサラダか等を答えれば良かったのだが。そういうこととは知らず、どんどん訊いてくるので困った。慣れれば簡単なんだろうが...

(帰国後、すべての料理のメニューがAMTRAK社のHPに掲載されていることが分かった。事前に見ておけばかなり助かったのだが。参考までに、[列車で使える主なカードは「Master Card」と「VISA」](#)) [★ゼファー号の食事メニュー](#)

向かいの男性は物静かな感じだったが、僕が注文に困っているのを見て、助けてくれた。この時には、彼が後に僕に大きく関わってくるようになるうとは予想もしていなかった。彼とは余り会話も弾まなかったが、突然列車が遅れる話になった。

彼 「今、この列車は40分遅れていて、これからもっと遅れるかもしれない」

僕 「予約しているホテルやフライトをキャンセルしたほうがいいですか？」

彼 「今の時点では何とも言えない。明日判断したいので、明日僕に訊いて欲しい」

僕のプランではシカゴ駅到着時刻とフライトとの余裕時間が3時間以上あり、列車の遅れを余り深刻に考えていなかったし、その時は彼が何者か知らなかったのも、特に気に掛けなかった。

彼と同時に席を立つと、彼は一般車の方へ歩いて行った。僕は展望車に行き、既に食事中から魅入っていた窓からの景色を引き続き堪能することにした。

列車はユタ州からコロラド州に向かって走っている。遠くに見える景色は想像を絶する広大さで圧倒された。下の写真はその景色のほんの一部だが、車窓から展開されるスケールの大きさに目を釘付けにされ、それらは今まで見たこともない景色で、アメリカの大きさを改めて思い知らされた。



隣で観ていた男性に山並みの名前を訊くと「メサズと言って、スペイン語でテーブルを意味する「Mesa」から来ているんだ」と教えてくれた。

(帰国後「メサズ」(多分、Mesaの複数形)について調べて見て分かった。

ユタ州は「ボルテックス」と呼ばれる個性的な赤い山々に囲まれた[セドナ](#)(パワースポットが点在する観光都市)があるアリゾナ州の北に隣接しているので、その山々の延長上の景色と考えられる。

ボルテックスはその形状により大きく四つに分けられており、その一つに「[エアポートメサ](#)」と呼ばれる台形の山があり、これが僕が見たメサズに類似している)

僕は写真を撮り続けていたが、次から次へと素晴らしい景観が現れる。少し離れた席で景色を見ていた男性客が僕の後ろを通り過ぎる時、一言「きりがいいだろう」と笑顔で言った。

昼食は60代前後のご夫婦(らしき男女)と同席だった。女性の方は僕と同じ位か。3人だけだったせいか、気兼ねなく、今までで一番楽しく話しが弾み、彼らが僕に気配りしてくれているのが判った。特に、女性は日本のことや僕個人のことも訊いてくれて嬉しかった。

男性の方も日本文化や神道に少なからず造詣があった。僕も日本の文化や宗教について語ったのだが、語彙が思い出せず、言いたいことが相手に伝わらず悔しい思いをした。

津波の話が出た時、女性は「私、津波の映像を見て泣いたのよ」とジェスチャーを交え話した。僕は「Thanks for your praying for Japan.」と言うと、彼らは神妙な顔をして頷いた。



僕たち3人は展望車に移った。女性は携帯でペットの猫の



写真を見せ、

彼女 「あなたは何か飼ってるの？」

僕 「ボーダーコリー」

と答えると、彼らは目を合わせ、驚きの表情を浮かべた。

僕は愛犬ボギーの写真を見せ、「ボギーの名前の由来は分かる？」と訊くと、男性が「ハンフリー・ボガード」と即座に言い当てた。さすがアメリカだ。

彼女の猫の名前は「ビビ」といった。

僕 「何か意味があるの？」

彼女 「No」

とちょっと恥ずかしそうに答えた。

僕 「Sounds good？」

彼女 「Yes」

と彼女は頷いた。

列車の窓を覗くと深い渓谷を緑色したコロラド川の渓流が流れている(写真下)。

列車での生活が始まり、1日半が経ち、話相手にも恵まれ少しずつ一体感を感じ始めていた。展望車に1時間くらい居ただろうか。疲れのせいか、急に睡魔が襲って来て、耐えられず「Thank you for talking」と言って自室に戻った。





2時間くらい仮眠を取ると夕食の時間になった。昨日のランチから4度外人に囲まれて食事をすると、疲れが蓄積してきて、正直、食事に行くのが億劫になった。その疲れは、相手の話を聞き取ろうと1時間以上、集中力を維持することによるものだ。とはいえ、食事をしない訳にはいかないので、重い腰を上げ食堂車に向かった。

今回もテーブルに着いた客は皆初めての顔ぶれだった。正面に30代の黒人女性と斜め向かいに40代の白人男性、右隣は50代の女性だった。最初、彼らの話に入れなかったが、僕は列車の遅れのことが気になり、皆に尋ねてみた。

僕 「シカゴ駅からオヘア空港までどれくらい時間が掛かるか知ってますか？」  
黒人女性 「注文取っているあの女性がシカゴ出身なの。訊いてみては？」

彼女に呼ばれて、毎回僕の注文に泣かされていた女性スタッフが来た。  
女性スタッフ 「オヘア空港まではタクシーで1時間だけど、この列車は3時間遅れるわ」

「えっ、ウソだろ」(;°Д°)

旅行プランでは、シカゴ駅からフライトの出発までの時間は3時間だが、もし列車が3時間も遅れれば完全にアウトだ。フライト2件、ホテル2件の予約が状況によっては全滅する恐れがある。

「緊急事態だ！」

食事と一緒に缶ビール2本飲み終え、デザートを目の前にした心地良い状況から、一気に深刻な状況へ急降下だ。「さて、どうしようか...」と腕組みをして考えていると、斜め向かいの男性が声をかけてきた。

彼 「あとビール10本飲めば忘れるよ」

これがアメリカンジョークか。しかし、誰も笑わない。今思えば「あと30本必要だね」と返せば良かったのかも...。「やれるだけのことはやろう」とショートケーキを一口ガブリと食べ席を離れた。

部屋に戻った。日本人は僕一人。パソコンは無い。言葉にもハンディがある。「冷静に、冷静に」と頭の中で繰り返し、「まず、この時点でキャンセルできる可能性が高いものから手を打って行こう」と、旅行のすべての情報が納められているファイルを開いた。

明日宿泊予定の「[Days Inn Naiagara](#)」は、キャンセルは無理だと思い、あさって泊まるカナダ側のホテル「[Oakes](#)」(オークス)をキャンセルすることにした。

電話に出たホテルの男性スタッフに経緯を話し、キャンセルしたい旨話したが、相手の言っていることが聞き取れない。埒があかないので、電話を切りNYの友人にメールを打つことにした。

(帰国後、電話料金の請求内容を見ると、列車からホテル(カナダ)への約10分間の電話代が約5千円だった。だが、その時は電話料金のことを考える余裕はなかった)

突然「コン、コン」と部屋のドアを叩く音がした。顔を向けると、この車両の接客担当「John」が顔を出した。「何事だろう」と出て行くと、今朝、食堂車で話をした男性が後ろに立っていた。

「話があるから」と呼ばれ、車両中央の比較的広い場所で話をした。彼は列車の遅延で僕が困っているだろうと、対策案を考えてくれていたのだった。

彼 「さっきのアナウンスの内容を知っていますか？」

僕 「No」

彼 「そうですか」

とうなずいた後、彼の対策案を提示し説明した。

彼の提案は「[オマハ駅](#)で途中下車し、タクシーで[オマハ空港\(ネブラスカ州最大\)](#)に行き、そこから飛行機でシカゴの[オヘア空港](#)に行く」というものだった。そうすればこの列車より早く着くと。

僕 「Is This the best conclusion?(これは最良の結論ですか?)」

彼 「Yes. Best conclusion. Best conclusion」

と二度繰り返した。

「何故、こんなに心配してくれるのだろうか」と不思議に思い、彼を見ると、首にスタッフのIDがかかっていた。「そうか、彼はAmtrak社の社員だったのか」

僕にはまったく情報が無いので彼の提案を受け入れるしかなかった。僕は部屋に戻り、すべての情報が入ったファイルを彼に渡した。彼はファイルに目を通し、その場から携帯電話で航空会社に電話し、航空券を確保してくれた。

僕は航空券代2万円を払うことにより、当初の計画通りに旅行を進める状況にまで回復でき、テキパキとした彼の仕事ぶりに感心した。

(決済は、彼にクレジットカードを渡し、パスワードを教え電話だけで済ませることができた)

一段落したので僕の部屋に入ってもらい話をした。彼は『履行出来なかった部分に対してMr.Satoに返金してあげてくれ』という趣旨のメモを書き、名刺を添えて僕に手渡ししながら「この手紙をオマハ駅の責任者に渡して欲しい」と言った。

僕は仕事とはいえ、彼の尽力に対し感謝せざるを得なかった。最後に彼から名刺を受け取った。名前を「[Scott Leonard](#)」といった。僕は「この名刺は良い思い出になるなあ」と言う(勿論、皮肉を言うつもりはなかったのだが)彼はちょっと苦い表情を浮かべた。

全ての手続きが済んだので、「Thank you」と言い、彼とは握手をして別れた。最悪の状況から脱出できたという意味では、喜ぶべきかも知れないが、全額自己負担とは何とも割り切れない。オマハ駅到着は明日早朝4時59分だった。今夜はとても眠れそうにない。

(帰国後、Amtrak社のHPを調べていたら、組織表の中に彼の名前を見つけた。「[政府関連業務の立法サポート部門の役員](#)」だった。列車にはAmtrak関係者の専用車両があり、あの時のカジュアルな服装とその役職から推察するに、彼はプライベートな旅行中で、偶然乗り合わせていたのだと思う。そう言う意味では僕は逆に運が良かったのかも知れない。だが実はそうではなかった。詳細は後述。)



## 5. シカゴ中心街散策

---

3月24日(土) 晴れ☀

あまり眠れないまま到着予定時間30分前に「John」が起こしに来た。僕は既に起きていて、すぐにでも下車できる状態だった。列車がまだ暗いオマハ駅に着いた。下車した客は僕の他にはいなかった。

「John」に遅延の原因を確認すると、彼はその原因を声高に答えてくれたが、「Mississipp Riverと Bridge」という程度の言葉しか聞き取れなかった。

(帰国後、調べてみると、この橋は「[バーリントン鉄橋](#)」といい、[アイオワ州](#)と[イリノイ州](#)との州境を流れるミシシッピ川に架かっている可動式の鉄橋で、その下を貨物船が通行している。川が増水した場合に水面が上がり、船が鉄橋をくぐれなくなるため、鉄橋の一部が回転し、船が通過するまでは列車は待たなければならない)

今回も増水の影響で列車が大幅に遅延したのだと思った。

### 【追記】

'14年6月、突然AMTRAK社のMr.Leonardからメールが来て、列車の遅延について詳細に記されていて、私の推測した遅延理由が間違いであったことが判明した。

本当の理由はバーリントン鉄橋の取替え工事によるものだった。その工事による列車の遅延に対応するために、彼を含め数人のスタッフが列車に乗り込んでいたのだ。



僕はレナードから預かった『列車代金の返金依頼』の手紙をオマハ駅の責任者に渡すために、駅舎に立ち寄った。構内は薄暗く、窓口の中は明るいけど誰もいない。駅舎から外に出て見回したが暗く、ローカル線の田舎駅のような感じだった。

椅子に腰掛けて待っていると、黄色いヘルメットをかぶった安全管理責任者風のスタッフが帰って来たので、主旨を話してメモを渡した。

彼 「ここに責任者はいないよ」

僕 「事前にレナードが電話を入れてるはずなんだけど」

と言うと、僕の持ってきた資料のコピーをとり、

彼 「請求は自分でやってほしい」

しょうがないので、請求先の住所を教えて貰い、駅前のタクシーでオマハ空港に向かった。

タクシーは10分でオマハ空港に着いた。フライトは10時43分。待ち時間が5時間もある。空港の構内は広いが人影はまばらだ。疲れていたのでも、2階のロビーで仮眠を取ったり、食事をしたりして時間を潰すことにした。

あれほど楽しかった状況から一気に独りにされ、いったい誰を恨めばいいのかわからない。長い待ち時間も過ぎ、搭乗手続きをするためにセキュリティ審査を受け、待合室に向かった。

飛行機は予定通り12時20分にシカゴのオヘア空港に着いた。

バッファロー行きのフライトは18時50分。また、5時間の待ち時間だ。時間つぶしにシカゴの市街地でも見てくると「ブルーライン」と呼ばれている地下鉄を探したが見つからない。

近くの航空会社の巨漢黒人スタッフに訊くと、「ついて来い」と言う。空港内はとても広くずいぶん歩いてやっと地下鉄を表す「train」の表示を目にした。別れ際に「Thank you」と言うと、彼は悪戯っぽい笑顔で「アリガト」と日本語で返してきた。

地下鉄に乗り、しばらくすると、アジア系の青年と若い白人女性(なかなかの美人)が乗って来て、僕の前に立った。僕は隣の席の荷物をどけて席を勧めると、女性が僕のガイドブックを指差して日本語的に「アメリカ」と言ったので、青年に「Japanese?」と訊くと、「そうです」と日本語で答えた。彼はNYにある大学でマーケティングを専攻している3年生。休暇なのでシカゴに住んでいる彼女に会いに来たという。

彼 「大学で日本人は僕一人だけで影が薄いんです」

僕 「どういうこと？」

彼 「クラスでは、というかアメリカではアジア人を下に見る雰囲気があるんです」

僕 「それはあるかも知れないね」（と言うしかなかった）

彼 「大学は厳しく勉強が大変で今すぐにでも日本に帰りたいんです。日本の大学が羨ましいですよ。勿論、留学させてもらって親には感謝していますが。」

僕 「日本は景気が悪いからアメリカで就職しては？」

彼 「う～ん、僕は日本人だから」

僕 「外人になっちゃうからね」

彼 「そうなんです。アイデンティティとかの問題が...」

僕 「実はシカゴ行の列車の遅延トラブルで疲れているんだよ」

彼 「見た時に疲れているのがはっきり判りましたよ」

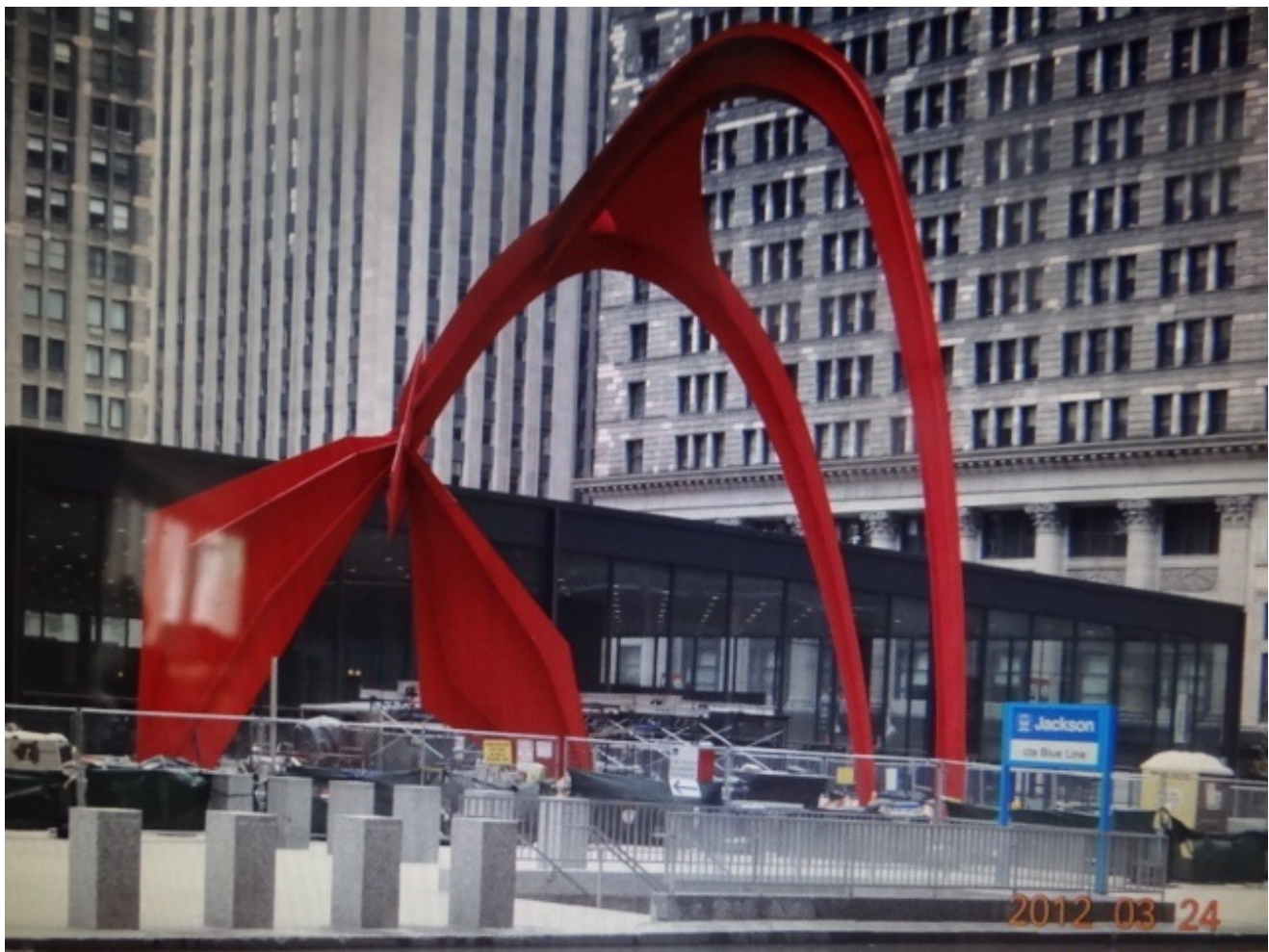
僕 「シカゴの観光地でどこかいいところない？」

彼女 「シカゴ美術館で面白い展示をやっているわ」

僕は彼らとお互いの目的地である「Jackson駅」で下車し、彼を激励して別れた。彼はイケメンで口舌さわやかな好青年だった。

4時間程度の時間では行動範囲が限られているし、疲れているので余り動く気がしなかったが、とりあえずシカゴ美術館に行くことにした。

駅の階段を上がり、地上に出たところに「フラミンゴ」と呼ばれている朱色をした造形物がいきなり現れた(写真下)。ガイドブックで紹介されていたオブジェだ。ただ、周りが工事中で柵に囲まれ、雑然としていて残念だった。(シカゴには数多くのパブリックアートの建造物がある)



道を尋ねながらシカゴ美術館(アメリカ三大美術館の一つ)に着いた。疲れていた为中に入らず記念写真を撮り、途中でトラブルでも起きたら大変だと思い、早めに空港に引き返すことにした。

地下鉄の改札口で、切符を買おうと自販機に\$10札を入れるがそのまま紙幣が出てくる。何度やっても同じだ。すると突然黒人の青年が現れて、自販機と僕に向かって大声でしゃべり出した。何を言ってるのか分からない。一体何者なんだ。関わりたくなかったのでその場から離れ、駅の階段を上り地上に出た。

少し歩いて周りを見渡したが他に地下鉄の駅らしき標識も見当たらないので、もう一度切符を買いにさっきの自販機に戻った。が、やはり結果は同じだった。

すると今度は駅の職員らしき男が来てた。

彼 「この自販機はおつりが出ないので、切符代と同額のお金を入れてくれ」

そういうことか。しかし、シカゴの中心地でそんな旧型自販機があるとは...

ホームに出ると若い黒人女性がマイクを片手に歌を歌っている。地下鉄の駅のホームでのパフォーマンスだ。日本ではちょっと考えられないが。

電車が来たので行き先をしっかりと確認し乗車した。ただ、睡魔には勝てず熟睡してしまった。目が覚め、停車した駅名を確認すると「Harlem」だった。マップで調べると、逆方向の終点のひとつ手前の駅だった。「いったいどうなるんだろう」と理解できないまま、一旦、電車から降りることにした。

再度、落ち着いてマップを調べると、同一路線で同じ名前の駅が二つあった。スペルも全く同じ。

「普通あり得ないだろう」(-\_-;)

(帰国してネットで調べたがやはりそうだった。 [Chicago Raylway Map](#))

僕が降りた駅は空港に近い駅の方だった。結果的には良かったが...。オヘア空港でも厳重なチェックを受けて、無事、搭乗した。

いよいよナイアガラに向けて出発する。

## 6. バッファロー（ナイアガラ）到着

---

3月24日(土) 雨 ☂

**バッファロー空港**(正式名:**バッファロー・ナイアガラ国際空港**)には予定通り、夜の9時20分に着いた。  
既に日は暮れて、おまけに雨まで降っている。

空港ビルから外に出ると辺りは暗く閑散としていて、ナイアガラ方面へのバスやタクシーなど見当たらない。バッファロー空港の周辺がまさか、こんなに寂しい所だとは思ってもいなかった。僕と一緒に降りた乗客は少なかったが、彼らは迎えの車に乗って、闇の中に消えていった。

しょうがないので、道路の向こう側にちょっと派手なマイクロバスが4台留まっていたので、ホテルの住所が書いてあるメモを持ち、一番近くの車に乗り込んだ。

僕 「このホテルに行きたいんだけど」

運転手 「それは向こうだよ」

と前方を指差す。

僕 「Thank you」

と言ってその方角に向かった。

そこには簡易な待合所があり、室内には明かりが点いている。すぐ近くに、ワゴン車が留まっていて、運転席は暗いが人がいる気配がする。待合所を覗くと、客は誰もいない。壁には張り紙があった。

『**怪しい誘いを受けた場合は警察に連絡して欲しい**』

気味が悪いので、空港の玄関に戻り、逆方向に行った。すると、少し離れた薄暗いところに「TAXI」と書かれた車のそばに男が二人立ってこっちを見ている。怪しいとは思ったが雨も降っているし、他に車もなく、話だけでも聞いてみようと思いついた。

一人は中近東系の若い男で、もう一人は年配の細身の白人男性だった。

僕 「このホテルに行きたいけど、いくらかかる？」

二人は住所の書いてあるメモを覗き込み、

若い男 「70ドル」

僕は話にならないと手を左右に振り、引き返えそうすると、

若い男 「いくらならいいの？」

僕 「ガイドブックでは**45ドル**だった」

すると、二人は顔を見合わせ、あっさり「OK」と言った。

年配の男が笑顔で手を差し出したので、僕も「OK」と言って握手をした。45ドルはガイドブックにあった一番安い料金だったのだが、少し甘かったかな。

さっそく車に乗り込み(あの若い男は乗車しなかった)、雨の中を車は走り出した。運転手は話し好きで車内では色々な



話をした。彼はバッファロー生まれの65才。昔は車関係の仕事をしていて、日本車のメーカーについて詳しくあった。

車は高速道路を水しぶきを上げて走り、約30分でナイアガラの滝のアメリカ側に建っている「[ディズインナイアガラホテル](#)」に着いた。車を降りる時に、

運転手 「今度、空港に行く時にはここに電話をしてくれ」  
とカードを差し出した。

翌日、カードを見ると「[Airport Taxi Service社](#)」のカードだった。この会社はガイドブックに載っており、料金はまさに45ドルだった。

今回は通常料金だったが、最初に彼らが言った「70ドル」は、やはりぼったくろうとしたのか。あの若い男の目付きには嫌悪感さえ感じた。

ホテルでチェックインを済ませ、1階のレストラン(といってもデニーズだが)で、ハイネケンのビール2本とソーセージを食べた。僕はかなり疲れていたせいか、よく冷えたそのビールは最高に美味かった。

レジでカードで支払うとレシートを提示され、チップの欄に金額を記入してくれという。「へえ、そんなシステムなのか」と驚きつつ、\$2と書き込んだ。因みに、ここのデニーズは24時間営業だった。

## 7. ナイアガラの滝

3月25日(日) 曇☁ → 晴れ☀

久しぶりに快適な環境で寝たおかげで、疲れがかなり回復できた。

朝7時前に起きて窓から外を見ると雨は止んでいて曇っている。近くの建物のディスプレイには気温42°Fと表示されている。摂氏に直すと5°C位だ。

シスコではその暖かさ故に無用の荷物と化したコートや、ヒートテックの下着が、やっと活躍できる時が来た。フロントでチェックアウトをした後、スタッフの女性に写真を撮ってもらい外に出た。

外はやはり寒い。が、寒さ対策で買った衣類のおかげでちょうどいい感じだ。歩いている人は誰もいない。ホテルはナイアガラに架かっているレインボーブリッジ(アメリカ側とカナダ側を結ぶ橋)に近いことは分かっているが方向感覚が定まらない。とりあえず緑色の大きな道路標識のある方に歩いて行き、立ち止まった(写真下)。

「あれ？この景色ってどこかで見たことがあるなあ。日本にも似た景色があったっけ...。」

何か「デジャブ」のような感覚を受けた。「あっ、わかった！Google Earthでナイアガラを検索した時に見た景色だ。」これはかなり橋に近いところに来ている。



少し行くと「Pedestorian to Canada」(カナダ方面 歩行者用)の標識があり、矢印が出ているが、僕の思っている方向とが違う。

「どっちだろう」と迷っていると後ろからカートを転がしながら、黒いコートを着た、細身の、背の高いインド系の男が近づいて来た。歳は30才くらいか。

僕「レインボーブリッジに行くの？」

とその方角を指差すと首をタテに振る。

僕「どっちの道だと思う？」

と訊いたが、いまいち反応がない。すると、地元住民らしき二人の白人男性が歩いてくる。「彼らに訊こう」と彼に目で合図して彼らに尋ねた。

「橋はこっちを真っ直ぐだ。カナダに入るのか？だったらパスポートは持っているか？」

僕は「Yes」と答え、彼らの後に付いて行った。

僕は無口な彼と並んで歩いた。「どこから来たの？」と訊くと首を横に振る。「ん？」繰り返して訊くと手を振って言葉が解らないという仕草だ。「Where are you from？」が解らないって？僕も英会話は苦手だけど、それくらいは知っていると大変だろう。僕は自分を指差し「Japan」と言うと、彼は急に笑顔になり「パキスタン」と答えた。

やがて橋に着き、4人で渡り始めた(写真下:橋をカナダ側から撮影)。滝はまだ見えないが、僕はテンションが上がり、写真に忙しくなり3人との間が開いたが、懸命に走って追いつき、4人でカナダの入国審査の建物に入った。



審査官は40才代の女性(シガニー・ウィバー似のクールな感じ)が一人だけで、他に誰もいない。まず、アメリカ人二人が通過し次に僕が行った。

「Hi!」自分でも驚くほど元気な声で挨拶すると、彼女も「Hi!」と返してくれた。

「何日泊まるのか?」「荷物の中に何があるのか?」等、いくつかの質問に答えたが「どこに行くのか?」と訊かれ、思わず「There」とカナダ側を指差したが、まずいと思い、すぐに「Canada」と言い直した。が、彼女はまったく表情を変えなかった。

無事、審査を通過し、ドアを開け部屋から出たところでガラス越しにパキスタンの彼を待つことにした。

審査官「Passport」

彼「...」

審査官「Passport! ID!」

彼「...」

審査官は声を荒げるが彼は何も答えない。僕は見るに見かねてドアを開け、審査官に「僕は彼にさっき会って...」と言い、彼に向かって「Passport!」と自分のパスポートを上にかざした。彼は分かたらしく胸のボタンを開けパスポートを提示した。

審査官「どこから来た?」

彼「...」

再度、僕が何か言おうとすると、審査官は僕に向かって「Go ahead!」と怒鳴ったので、慌てて外に出た。

「いったい彼はどうなるんだろう」と考えながら滝に向かって歩いた。「カナダ側に行きたいのならもっとアピールというか、気持ちを見せればいいのに...」だが、彼にはそのような動きや態度は全くなかった。

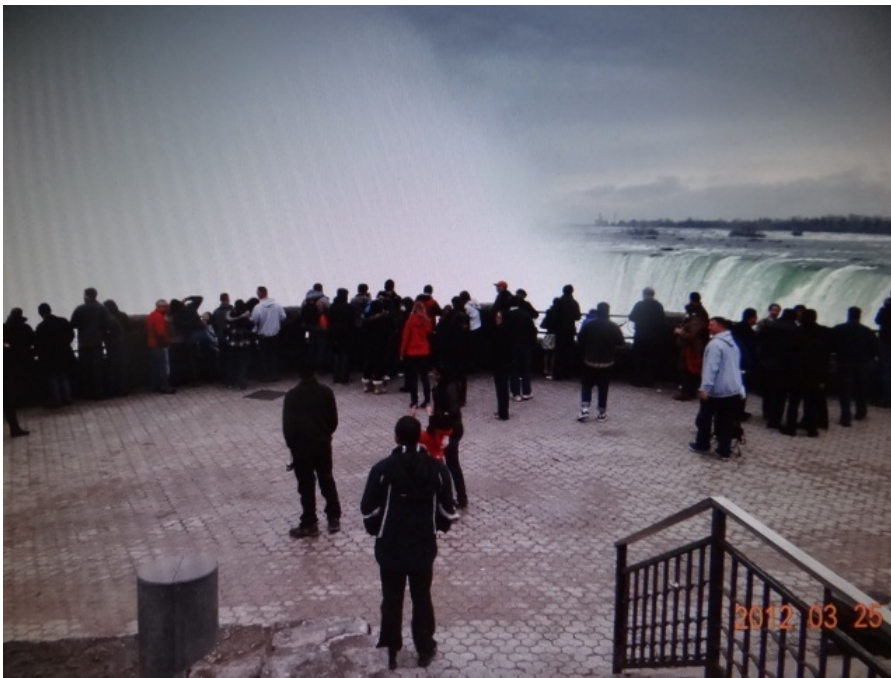
時々、後ろを振り返り確認したが姿はどこにも見当たらなかった。

(その日、滝の周りに一日中いたが彼らしき男性を目にすることはなかった)

空はどんより曇り、滝の辺りは霧と滝つぼから吹き上がっているしぶきとで、視界が良くない。こんな天候では滝が見えないなあと、少し落ち込んだ。早朝のせいか観光客も少ない。

橋から滝まで約1.5km。滝に近づくが霧が晴れず滝が良く見えない。やっと滝の一番近くまで来た。

テーブルロック(写真:下)と呼ばれる場所だ。ガイドブックに拠ると滝の落差は54m。川から下に向かって落ちる景色は10m位までは見えるが、そこから下の景色は見えない。仕方ないので先に昼食を取ることにした。



昼食は滝の近くのファーストフードの店でコーラとハンバーグにした。

窓から外を見ていると大きなシベリアンハスキーが広場でじゃれたり、寝そべったりしている。可愛いので一枚写真を撮った。



食事を済ませて、飼い主と思われるアジア系女性に話しかけた。僕と同世代くらいか。彼女は上海から来ている中国人で、カナダの友達の犬を散歩させていると言う。

「彼(犬)が寝転がっているところが可愛いから、あそこから写真を撮ったんだ」と言うと笑っていた。勿論、我が家の愛犬ボギーも紹介しておいた。

そういえば、滝の裏から滝を眺められるはずだと思い、建物の中に入り、うろうろ探して入口を見つけた。

「Behind the Falls」(料金11<sup>ドル</sup>、25<sup>セント</sup>(約900円))。エレベータで地下に38m降りて、トンネルを30mくらい歩くと滝の裏(というより横)に出る。しぶきと霧で視界が悪かったが迫力だけは感じた。

疲れたので、早めにチェックインしようとホテルに向かった。テーブルロックからホテルが建っている場所との高低差が約30mの急勾配だ。近くに、ケーブルカー(名称:インクライン レールウェイ)があるが、2.5カナダ\$だ。節約しようと歩いて登ろうとしたが、道が見当たらない。止む無く、ケーブルカーでホテルに向かった。

今夜は立地が良く景観が売りの「オークスホテル(the Oakes Hotel)」だ。

チェックインを済ませ、エレベータで9階に上がり、少し狭い薄暗い廊下を歩いて、部屋に向かったが、何となく滝が見えそうな気がしない。その場合は部屋を替えてもらおうかと思いつつ、ドアを開け部屋に入った。なんと目の前が滝の正面だ(写真下)。素晴らしい景観だ。霧もだいぶ晴れて視界が見連えるほど良くなり、観光客も多くなってきた。



夜になるとホテルの窓から滝が青や黄色でライトアップされていたので、歩いて滝まで観に行ったが、人工的で美しいとは感じられなかった。人影もまばらで、ここがナイアガラの滝の観光地とは信じられないほど暗く、静かだった。

ホテルにはケーブルカーで帰ろうと、乗り場まで来たのだが既に営業を終了していた。遠くから見ると明かりが点いていたので、動いているかと思ったのだが...。(紛らわしいなあ(^`))

仕方がないので遠回りして歩いて帰る途中、某ホテルの駐車場に観光バスが5, 6台入っていたがすべて中国人客を乗せたバスだった。中国の経済的勢いを改めて感じさせられた。

夕食はホテルに隣接しているレストラン「[Applebee's](#)」で、大きな豚バラ肉のグリルを食べた。これは、甘辛で旨かった。

ナイアガラには結構期待をしていた。確かに凄いと思うが、半日観ると正直、飽きる。ここは一日観光というか、日帰り観光でも十分だと思う。

## 8. 強欲タクシードライバー

3月26日(月) 晴れ☀️ (風が強く非常に寒い)

朝5時に起きシャワーを浴びた。今日はアメリカに戻り、バスでバッファロー空港に行きNYに向かう。

ベッドにチップを置こうとしたがカナダドルがない。フロントで10USドル札をすべてカナダドルに替え(これが間違いだった)、チップを置き6時にホテルを出た。

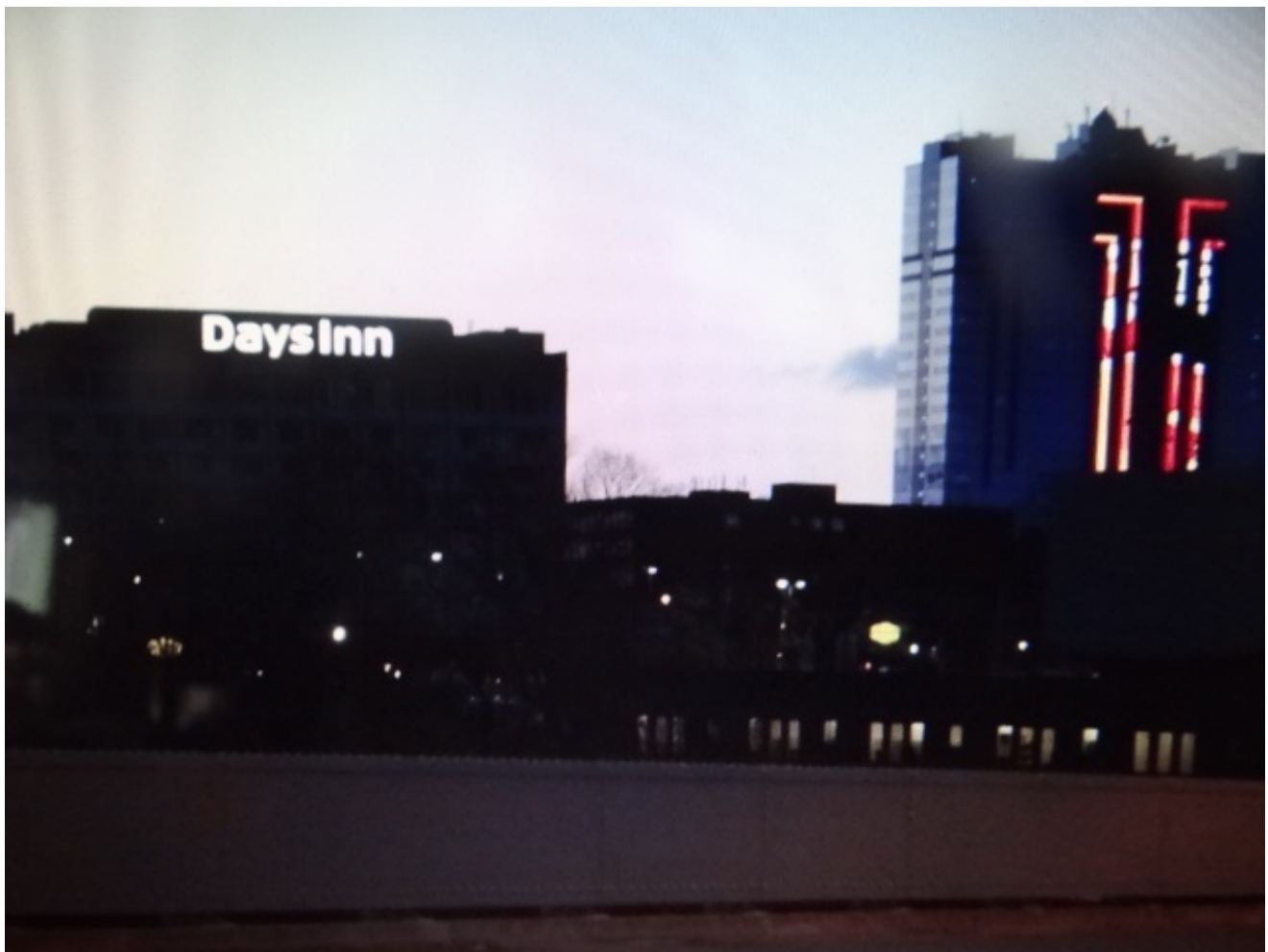
まだ、暗い中、道に迷いながら約1時間かけてレインボーブリッジにある管理事務所(写真:下)にたどり着いた。カナダからの出国は改札機に50セントを投入するだけで誰もいない。改札機を通り抜け、アメリカ側の建物に入った。



米国入国審査では少々嫌な思いをした。審査官は若く、彼の発音は今までで一番聞き取りづらかった。僕は「Perdon」を繰り返したが同じ調子で訊いてくる。仕方ないので勘で答えた。彼は写真と僕の顔を時間をかけて、まじまじ見ている。早くしてくれよ。暇なんだなあ。他に誰もいないから。

入国審査も通り、昨日泊まったホテル「Days Inn」(写真下)に置き忘れたメガネを探しに行ったが結局見つからなかった。フロントの男性スタッフに「It's very cheap」と言ってメガネは諦めた。

「昨日チップを置き忘れたのでここに置いておくよ」と言うと、彼は遠慮したけど2カナダドルを置いて来た。後で気付いたのだけど、アメリカでカナダドルは使えるのかな。



ホテルの近くの**カジノビル**(写真:右側)にバス停があると聞き、そこに向かった。歩いて10分程度のところだ。カジノビルの中を通ると、営業終了らしく客はいない。カジノ部屋を覗くとまるで大きなゲームセンターだ。

入口近くにいた20歳前後の若いスタッフ男性にバス停を訊くと、丁寧に教えてくれた。バス停は正面玄関を出たところだった。待ち時間が30分以上あるが、次が1時間後でなので、バス停で待つことにした。

※バッファロー空港からナイアガラに行くには**[メトロバス\(路線バス\)](#)**を乗り継ぐと安く行ける。

バッファロー空港

↓↑ **[路線#24\(片道\\$2\)](#)**

バッファロー市街

↓↑ **[路線#40\(片道\\$2\)](#)**

ナイアガラの滝

風が冷たくてホントに寒い。コートなしではとても耐えられない。隣で親子がバスを待っているが「寒い、寒い」と男の子が騒いでいて、母親はそれを見て笑っている。

バスがなかなか来ないので、母親に話しかけた。

僕 「バッファロー空港行きは、このバス停でいいんですよね」

彼女 「私も空港に行くのよ」

と言い、時刻表を見せてくれた。

僕 「時刻表は僕もホテルで貰ったんです」

時刻表を見せると、彼女の時刻と若干違っている。どうも僕の貰った時刻表が古かったようだ。

若いアジア系の女性が来た。カジノでの仕事帰りのようだった。

僕 「日本人？」

彼女 「ベトナム」

彼女は薄着で、寒風を避けるため向かいのビルに行き、ビルの陰に隠れて待っていた。

やっとバスが来た。しかし、直前になって米ドルの現金が無いことに気付いた。ホテルでカナダドルにすべて替えたのだ。迂闊だった。料金はわずか\$2.5だ。黒いサングラスを掛けた怖もての黒人の運転手に「カナダドルならある」さらに「クレジットカードならある」と言ったがダメだった。「next bus」と言われやむなく下車した。

流しのタクシーなどほとんど来ないので、近くのシェラトンホテルで、フロントの女性にタクシーを呼んで貰った。僕が持っても紙切れになるからと、カナダの5ドル札を彼女に渡すと、彼女は笑って受け取ってくれた。

しばらくしてタクシーの運転手が迎えに来た。70才近い爺さんだ。しかし、元気がいい。料金は \$55。僕がクレジットカードでしか払えないと言うと、

爺さん「それは困る」

僕 「でも電話でクレジットカードの話はしたが」と、もめた。

彼 「クレジットカードが使えるタクシーはバッファローにはない」

しかも「空港には外貨交換所が無い」という。

(帰国後、バッファロー空港のHPを調べたら外貨交換所が表示されていた。彼は知らなかったのか)

結局、銀行で円をドルに替えられるというので、タクシーで銀行に行くことにした。車はタクシーと呼ぶには余りにひどいポンコツ。まさに工事現場で見かけるバンだ。後部座席は荷物置き場になっていて座れないので、僕は助手席に座ると、爺さんは陽気に口笛を吹いて運転し始めた。

郊外にある銀行(支店)に着き、日本円からドルへの交換を依頼したが、取り扱っていないと言う。支店長らしき知的な女性が出て来て相談に乗ってくれたが、解決策が見つからない。車で待っていた爺さんもしびれを切らしたのか店内に入ってきた。

どうしようかと頭を抱えていると、銀行に来ていた客が外貨交換できる店を知っていた。その場所を聞いて爺さんと車で向かった。

爺さんはイライラしている。「今までこんなことはなかった!」「Extra charge!(追加料金だ)」と叫んでいる。僕は「No! No!」と答え、「知るかそんなこと」と思いつつも、トラブルを起こして飛行機に乗り遅れてはと、余計なことは言わなかった。

10分くらい走ると郊外にある二階建ての超大型スーパーに着いた。この中に外貨交換所があるらしい。二人とも無言だ。二階に上がった。アメリカはさすがに広い。数分歩いた。まだ各店舗は開店前。途中で爺さんは店の場所を訊いて更に歩く。すると、広い通路上に机2、3台にパソコンを置き、囲っただけの「FX」と店名が書かれた外貨交換所があった。

しばらくして店の男性スタッフがやって来た。

僕 「開店は何時から？」

男性 「10時から」

僕 「日本円は交換できる？」

男性 「Yes」

ホッとした。開店まで30分だ。二人とも傍のベンチに座り、無言で10時まで待った。店が開いた。交換レート



は87円/\$。2万円ほど交換した。それをすぐそばで爺さんがじっと見ている。ドルを受け取り、急いでバッファロー空港に向かった。

爺さんがまた口笛を吹き始めた。機嫌が良くなった。多分、交換した額を見て安心したんだろう。しかし、まだお互いに黙っているが、料金の駆け引きのことを考えているのは分かっている。空港に着き、車を止めた。

爺さん 「\$75！」といきなり叫んだ。\$20の追加料金だ。

僕 「No！\$55！」

爺さん 「今までこんなことはなかったんだ！」

僕 「Me too！」

爺さん 「I lost time！」

僕 「Me too！」「[Who is to be blamed?](#) (誰のせいだよ?)」

(何故か、突然昔覚えたフレーズが口を突いて出てきた)

爺さん 「You！」

僕 「Why？What did I do？You said I could exchange money at the bank. But I couldn't」

爺さん 「I don't know」

僕 「\$55！」


爺さん 「No！\$75！」

お互いに譲らない。急に爺さんは車から降りて何処かに行こうとする。「警察に行くぞ」という演技か。面倒な爺さんだ。僕も搭乗手続きがあるので「OK」と言い、支払った。

別れ際に「Take care.(気をつけて)」と言うと、じいさんも「Take care.」と返して来た。20ドルは痛手だが、英語で口論をするという人生で初めての貴重な？体験ができ、「強欲じいさんと行く外貨交換オプションツアー」と思えば安いのかも知れないが。

## 9. 1 ニューヨーク到着

---

3月26日(月) 晴れ 

急いで搭乗手続きを終え、無事飛行機に乗った。国内線はコンパクトな大きさと、CAも二人だけ。機内は満席で、僕の周りには米軍の迷彩服を着た黒人の青年6、7人が談笑していたが、離陸すると静かになり、眠っている様子だった。

しばらくして、コーヒーのサービスが来た。「砂糖いりますか？」と訊かれたので、つい「Black」と言った後、周りに黒人がいることに気づき「まづい」と思ったが、周りは平穏な空気のままだった。

(帰国後「Black」が差別用語になるのか調べたが、そうではないことが分かり安心した)

飛行機は予定通り午後2時にJFK空港に着いた。友人Kから「第2ターミナルのBaggage Claim(荷物受取所)で待て」というメールが入っていた。しかし、待ち合わせ場所を探したが、見つからず迷子状態になったので、来て貰うことにした。(友人曰く「JFK空港は分かり難いとのこと」)

友人を待っていると誰かが僕の肩を叩いて通り過ぎて行った。「ん？」と目を向けると、振り返って僕に手を振り笑っている。紺のジャンパーを着た背の低い小太りの黒人だった。初めてのNYで知る人などいる筈もない。「……。」。「あっ、思い出した」友人との待ち合わせ場所を訊いた人だった。

彼は空港ビルの外で作業をしていて、わざわざ手押し車を押しながら僕を案内してくれたのだ。その時僕は手を出し握手をして感謝したが、彼はそれを覚えていたのだ。普通、黒人作業者に握手までして感謝する人などいないのだろう。多分、彼はそれが嬉しかったのかも知れない。気持ちが通じたんだと、僕も手を上げて応えた。人は皆一緒だ。

友人と3年振りに再会した。彼の運転で彼の住居があるニュー・ジャージー(NJ)に向かった。初めてのNYを車で走る。何もかも新鮮だ。やがて目の前に高層ビル街が現れた。車はマンハッタンを横断し、ハドソン川の下をくぐる「リンカーntonネル」(1957年開通)を抜けて、NJに入った。

彼の住まいはハドソン川のすぐ傍にあるマンションだったが、まず、昼食を食べようということで日本食の店に行くことにした。

「MITSUWA」という日系の大型スーパーに入った。この辺りは日本人が多く住んでいる地域だそうだ。特に、バブル景気の頃は日本経済の勢いも良く、今の何倍もの日本人が住んでいたという。

中に入ると、確かにアジア系の人が多い。飲食店が20店舗くらい並んでいて、大半が日本食や中華料理の店だ。僕は「かつ華」の豚カツ定食を頼んだ。成田を飛び立って初めての日本食だ。出てきた豚カツの味はまあまあだが、思ったより大きく、少し残した。友人が言うには、量が少ないと文句を言う人がいるとのこと。

食事を終え、ビールやつまみを買込み、友人宅に荷物を置いた後、NJの南に位置するホーボーケンから「自由の女神」を観に行くことにした。

車で2~30分走っただろうか。自由の女神が近くに見える場所まで来て車を降りた。

風が強くて寒い。襟を立てて海のそばまで行ったが女神の後ろ姿しか見えない。これがあの自由の女神か(写真下)。目の前にしても、特別な感情は湧かない。後日、自由の女神をフェリーで観光する予定だったので、写真を撮り、寒いので急いで車に戻った。



日が暮れたので、マンハッタンの夜景を観ることにした。近くに絶好の場所があるという。マンションから車で20分ほど走り、その場所に着いた。ハドソン川に面する高台だった。車から降り、マンハッタンを観た(写真下)。



「凄い！圧巻だ！」今までに観た夜景(香港、シンガポール等)では最高だ。マンハッタン全体がビルとその明かりに覆われている。世界一の夜景と言っていいただろう。NYに来た甲斐があった。

マンハッタンの夜景は、NJ側と反対側のブルックリン側があるが、NJ側の方が人気があるという。写真を何枚も撮り、しばらく夜景に魅入った。

夕食は友人の手作り料理(?)でビールを飲んだ。疲れからか僕はそのままソファで朝まで眠ってしまった。

## 9. 2 ブロードウェイ散策

3月27日(火) 晴れ☀

朝7時に目が覚めると、既に朝食が用意されていた。ご飯、みそ汁、納豆、野菜炒めと純和風。やはり、みそ汁を飲むとホッとす。友人が会社に出かけた。疲れのせいか身体が少し重いので、12時まで寝て2時に部屋を出た。



今日は「**NY CityPASS**」を利用する予定だ。

(NY City PASS : NYの主要な観光地

- ◎自由の女神
- ◎エンパイアステートビル
- ◎メトロポリタンミュージアム
- ◎アメリカ自然史博物館
- ◎NY近代美術館 (MOMA)
- ◎グッゲンハイム美術館 等、

8ヶ所中最大6ヶ所回れる割安チケット。当時、最安値(70ドル)だった「[HIS\\_NY](#)」のサイトで購入)

マンハッタンにはフェリーで行くことにした。友人宅の目の前に「[NY Waterway](#)」が運行しているフェリー乗り場([Port Imperial](#))がある。中に入るとモニターに出航時刻が表示されていたので、次回利用するために写真に撮ることにした。カメラを構えて1枚撮ると、右手の方から「Hey!」という大きな声が響いた。見ると、制服を着た2人のスタッフがこっちに向かって歩いて来る。

スタッフ「何をしているんだ？」

僕 「時刻表を撮っていたんだけど」

スタッフ「Why？」

僕 「また、このフェリーを利用するから」

すると、彼はクルリと背を向けて、近くに置いてあるパンフレットを持って来て、

「これに時刻表が載っている。ここは撮影禁止だ」と言った。僕はそれを受け取り「I see」と言うと、彼はニヤリとして親指を立てて去って行った。(何のこっちゃ(?\_?))

やがてフェリーの出発時刻になり、係員にチケット(\$9)を渡し船に乗り込んだ。お客は20人もいなかった。窓から景色を観たが、窓ガラスが潮で汚れている。「これでは良い写真が撮れないなあ」と思った瞬間、「あっ、ウエストバックがない。」部屋に忘れてしまった(-;-)。



バッグには「NY city PASS」を入れていたので、それが無ければ今日のプランは白紙になる。取りに帰ろうとも思ったが、プランは明日に延ばし、今日は自由に歩き回ることにした。

携帯電話にはホステル「Times Square Guest House」※1と知人から紹介された日本食のお店「百百川」(ももかわ)の住所を登録してたので、先ず、その場所を確認することにした。

(※1 マンハッタンの中心にあり、マディソンスクエアガーデンまでは3分。6人部屋で一泊\$45。年齢制限は無し。但し現在は営業していないようだ)

15分足らずでフェリーは到着し、僕は初めての一步をマンハッタンに印した。

到着した建物を出たところにバスが数台留まっていて、それらの車体には「ライオンキング」などのミュージカルの絵が描かれていた。それを写真に収めた後、ホステルに向かって歩いた。



マンハッタンは「アベニュー(Av)とストリート(St)」で碁盤の目の様にきっちりと表示されているため、迷うことなく歩くことができる(Avは南北に走る道。Stは東西に走る道)。

街並みの写真を撮りながら30分以上歩いたらどうか、目的地の近くに来た。あまりきれいとは言えない中華料理屋、散髪屋とかが並んでいる。

「あった。ここだ」間口が狭く、入り口のドアは汚い。ホステルはこの汚れた古いビルの中にあるのか。入り口の左上を見ると、古い呼び出し用のベルが部屋別に並んでいる。

中に入ってみようとしてドアのノブを回したが、カギが掛かっている。「ここ大丈夫かなあ(-\_-;)」と、少し不安がよぎる。「まあ、汚いだけだろう」と次の目的地に向かうことにした。



次は和食のお店「百百川」の場所を確認する。マンハッ



ンの  
東

側(158 E 28st)だ。東に向かって20分位歩いて店の近くまで来た。「多分この辺りだが...」すると「見たことのある店」が目に入った。

近づいて確認すると、やはり「百百川」だった。これも「Google earth」の効果である。  
(マンハッタンは東西が僅か4 Kmなので十分歩いて動き回れる)

「今日の下調べは終わりにして、あとは自由に歩きまわろう」と思うと急に空腹を感じた。そう言えば、まだ昼飯を食べてなかった。何処にしようかと店を探していると、オープンカフェ風な洒落たトルコ料理の店の前にきた。店名は「[HUMMUS KITCHEN](#)」「ここにするか」店の中に入り、窓際に座った。

時間帯がずれていたせいか、客は女性客一人だけだった。ジーンズを履いた小柄でカワイイ白人女性スタッフ(20代か)がメニューを持って来て、料理の注文の仕方の説明を始めた。

はっきり聞き取れないが、「これらの料理の中から一品選び、次にこの中から一品選んで...」と言っているのは分かる。ただ、肝心の料理の中身が分からない。

まず、ビールと知っている料理の「ケバブ」を頼んだ。すると、もう一品選んでほしいと言うので、「この料理はどう？」と指さすと、「これ美味しいですよ」と薦められたのでそれに決めた。

料理を待っていると、店のBGMにクリストファー・クロスの「[ニューヨーク・シティ・セレナーデ](#)」が流れて来た。最近僕がハマってる曲だ。実にタイミングがいい。

暫くして料理が出て来た。挽き肉を丸めて周りをスパイスにカリカリに焼いた、ミートボールが5個皿乗っている。初めて見る料理だ。それを緑色したドレッシングに付けて食べた。結構香辛料が効いていて辛い。ビールのつまみ向きだ。

次に「ケバブ」が出て来た。白い紙に巻かれた春巻きのようなのが二つ。その一つに「がぶり」と噛みついた。





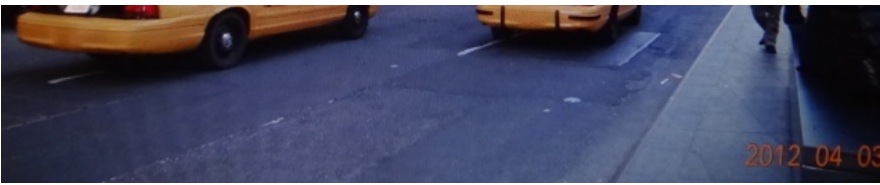
「うん、なかなか美味しい」 ゆっくりと一口目を平らげたがけっこうボリュームがある。  
彼女がビールを持って来た。  
彼女 「Good?」  
僕 「Good. but, too much」  
彼女 「Take out or stay here?」  
僕 「Stay here」  
と答え、二つ目も頑張って食べた。会計は約2000円と高くはなかった。

店を出る時、彼女に日本語で「カワイイね」と言うと「ん?」と言ったので、「Qute(キュート)」と言うと体をねじるようにして照れた。

店を出てブロードウェイに向かった。ブロードウェイの街中に来たら、ビルから煙が出ていて消防車も来ていた。でも、大したことはないのだろう、数人の消防士が帽子とって談笑していた。目の前の街並みは、テレビなどでよく目にする光景そのものだ。



平日のせい  
いか、観光客はそう多くはないが、やはり華やかさは感じられる。黄色いタクシー



一がひ  
っきり  
なしに  
行き交  
って  
いて、

赤い2階建て観光バスも走っている。

道の両サイドはビルで埋め尽くされていて、大画面のディスプレイにCMや映画の予告編などが映し出されており、公演中のミュージカルの看板がビッシリと並んでいる。「オペラ座の怪人」「シカゴ」「ゴースト」...。僕が観る予定の「マンマ・ミア!」もある。

広い道路の中央の浮島のような場所に建っている、赤い建物がミュージカルのチケットセンターで、当日券であれば30%~40%割引されたチケットが手に入る。その両側には当日券のディスカウント率を表示した、赤い電光掲示板が2台あり(写真:下)、数人のスタッフが客からの質問に対応している。



「マンマ・ミア」のチケット料金をスタッフの一人に訊くと\$70~80だった。1ヶ月前にネットで調べた時には\$80台だった。但し、料金は席のランクによる。ネットではランクを明記してはなかった。その時にミュージカルの席が1階のオーケストラ席や2階のメザニン席等に分かれていることを知った。

安い席は\$50くらいからあるが、それは2階の後ろの席で、そういったチケットは劇場で直接買えばいい。チケットセンターで販売しているのは、いわゆるプレミアムチケットを含めた高価な(最低\$100以上か)チケットが対象だ。僕は観覧日をまだ決めてなかったんで、それ以上は訊かなかった。

ところで、NYの最初の印象は、歩行者のマナーが良く、礼儀正しいことだった。

通行の邪魔をした時には必ず「Excuse me」と言う。すれ違う時、方向が重なりそうになった程度でも、必ず「Excuse me」と言う。だから、歩いていて、肩がぶつかったりすることは無かった。日本では、肩にぶつかっても謝りもしない場合がある。日本人が世界で一番マナーが良いとは言われているが...

旅の疲れか、長く歩き過ぎたのか、急に右ヒザが痛くなり、大事をとって友人宅に帰ることにした。帰りもフェリーにした。確かに便利で良いが片道9ドルは高い。明日からはバスにしよう。

部屋に戻りソファに横になった。いつのまにか友人が帰宅しており、しばらく談笑し軽く飲んで寝た。

### 9. 3 エンパイアビルステートビル登頂

3月28日(水) ❶ → ❷ → ❸ → ❹

昨夜、遅くまで日記を整理していたので、今朝は7時半まで寝た。友人は既に朝食を済ませ、シャワーを浴びているところだったが僕の朝食は既に用意されていた。

友人「今夜はステーキを食べに行くから6時までには帰って来て。可愛い女の子を連れて来るから」  
ほんとかなあ。まあ、期待しないでおう。

今日は昨日行けなかったエンパイアステートビルにバスで行くことにした。  
マンションの近くのバス停から終点の「Port authority bus terminal」(アメリカ最大のターミナル)まで30分の道のりだ。  
料金は\$3.5(と友人から聞いた)。

バスが来たので飛び乗り、黒人の女性運転手に3ドルを手渡ししながら、  
僕 「50セント？」  
運転手 「3 and 20」  
友人から聞いた金額とは違うが、25セント1枚を渡し空席を探した。バスには両替機は付いておらず運転手に直接お金を手渡す。5セントのお釣りなど返そうともしない。そういう文化だ。

バスはリンカーントンネル辺りで多少渋滞したが、程なく終点に着いた。が、パスポートを忘れたことに気付いた。パスポートなしで「NY City PASS」のバウチャーを切符に交換してくれるだろうか。IDとしてはクレジットカードが使えるか。ちょっと心配だ。

エンパイアステートビルに着いた。入口の黒人スタッフに「切符に交換して欲しい」と訊くと2階に行けという。中に入り、スタッフの指示に従って2階に上がると、まるで空港並みのセキュリティ審査が待っていた。まだ、チケットに交換していないのに、ズボンのベルトまで外しチェックされた。



無事、審査を通り、切符売り場に来た。窓口は5ヶ所くらいある。  
一番左の窓口に行き、バウチャーを差し出し、  
僕 「Ticket please」  
女性 「Passport」  
僕 「I don't have a passport. But, I have a credit card」  
カードを渡すと、彼女は僕の顔をマジマジ見て、渋りながらも「NY CITY PASS」に交換してくれた。

エレベーターで一気に80階まで上り、ビルの歴史に関する展示室と土産売り場を通り抜け、更に高い86階(320m)の展望台に再度エレベーターで上がった。

(ビルは1931年完成。102階建 最高部443m)

建物の室内から外の展望台に出た。外気が心地良かった。空は快晴で展望台から観る景観はまさに360度のパノラマだった。



ここから眺めると、マンハッタンは高層ビルの塊だということが良く分かる。遠くにはハドソン川が流れ、自由の女神も見える。体を乗り出して下を覗くと、黄色いタクシーが行き来しているのが見えるが、少し、恐怖感を覚える。ガイド用のヘッドホン(無料)で景色の説明を聞きながら、番号順に展望台を一回りした。1時間以上景観を堪能した。

ビルから外に出ると雨が降り始めた。ちょうど腹も空いたので、店に入りイタリアンサンドを食べた。

店の外に出たが、まだ雨は降っていた。満腹になったせいか、急に睡魔に教われて眠たくてしょうがない。時差のせいなのか、突然強い眠気に襲われ、歩くのも困難なほどだ。

ちょうど近くに**ニューヨーク公共図書館**(1911年設立。設置主体は独立の法人であり、民間からの寄付に依っている)を見つけたので、そこで休むことにした。



中は厳肅な雰囲気、簡単なセキュリティ審査を受け、正面のエスカレーターで2階に上がると皆さん静かに本を読んでいる。僕は一番奥の机を選び、椅子に座って目を閉じた。眠りは浅かったが、1時間位休むと少し眠気が収まった。

外に出ると、雨は止み、嘘のように晴れ上がっていた。「3時半か」中途半端な時間なので、「NY City PASS」での観光は明日にして、ブロードウェイに「マンマ・ミーア」の安いチケットを探しに行くことにした。

ブロードウェイの中心に来ると多くの観光客が集まっていた(写真下)。

「マンマ・ミーア」のチケットを電光掲示板で探したけれど見当たらない。「割引の対象になっていないのかな」と考えていると、若い白人男性が話しかけてきた。

男性 「何を探しているの？」

僕 「マンマ・ミーア」

男性 「マンマ・ミーアの公演は明日。ここには当日券しか表示されないから」と教えてくれた。



僕 「じゃあ、明日、また来るよ」

まだ時間があつたが友人との会食のこともあり、早めに帰ることにした。

5時半過ぎに戻ると、友人が帰って来て「今から店に行くから準備してくれ」と言った。

早速、車に乗り込み、店に向かって出発。今日は友人の会社の部下3人を招待したという。N Jにある老舗のステーキハウス「[STEVE'S SIZZLING STEAKS](#)」に20分ほどで着いた。

カントリー風な内装で最初カウンターに座り、ビールを飲みながら3人を待った。間もなく3人が入って来たので、テ

ーブル席に移動した。

招待されたのは男性一人と女性二人。女性の一人は可愛い25,6才の日本人。関西弁で良くしゃべる明るい元気な女性だ。父親の仕事の関係で実質7年間アメリカに住んでいるという。英語はネイティブな感じ。名前はIさん。



話の詳細は省くが彼女は都合により5月に会社を辞めて日本に帰国するという。もう一人の女性アリーシャは地元NJ生まれ。日本に3ヶ月研修で行ったことがあり、前の職場もIさんと同じだったとのこと。唯一の男性バンダーは優しいようなブラジル人で40才くらい。彼とは席が離れていたため殆ど話せなかった。

全員、ステーキを注文した。



僕は200ポンド(約560g)の骨付きサーロインステーキにした(写真)。この大きさは食べたことがない。ちょっと大き過ぎたか。やがて、料理が運ばれて来た。やはり大きい。味はどうなんだろうかと、一口大に切って口に入れた。

「柔らかくて旨い！」日本人好みの味だ。醤油ベースの味付けだ。これなら、結構行けるかも知れない。一口ずつゆっくりと味わい、見事完食した。今まで食べたステーキで一番美味しく、十分日本で通用するレベルだ。

バンダーから「Good Job！」の声がかかった。完食したのは僕だけだった。やはり、長旅で身体を酷使していて蛋白質を欲していたのかなと思った。会話も弾み、あっという間に2時間が過ぎた。皆さん車なのでお酒は飲まない。別れる時も「ではまた」って感じで、二次会はどうするという雰囲気はない。こういう形もいいと思う。

僕はもう一度マンハッタンの夜景を見たくなり、友人と以前訪れた場所で30分くらい眺めて帰宅した。今夜はいい気分転換になった。

## 9. 4 「自由の女神」クルーズ

3月29日(木曜) 晴れ ★

今日は地下鉄でマンハッタンの南端にある「**South Ferry駅**」に行き、そこからフェリー(料金\$13)で自由の女神が建っている「**Liberty Island**」に上陸する予定だ。

朝8時過ぎに友人宅を出て、バスに乗り終点の「**Port Authority**」で降り、歩いてタイムズ・スクウェアの地下鉄**Pennsylvania Station**(通称「**Penn St**」)に着いた。初めての地下鉄だ。チケットは自販機で簡単に買えると思ったが画面に「**Cash**」の表示が見当たらない。

傍でチラシを配っていた女の子(17才位。白人の少女がチラシ配りとは珍しい?)に訊くと、サッと来て、画面にタッチして「**Cash**」の画面を出し、お釣りまで取ってくれた。

お礼に\$1コインを差し出すと、困惑した顔をしたので、「**Take this, please**」と言うと、受け取ってくれた。ホームに入ろうとしたが改札の通り方が分からず、また彼女に頼んだ。チケットを立てにしてスライドさせる。クレジットカードの要領だった。

自由の女神方面へ向かう路線番号が「1・2・3番」のホームに出た。ガイドブックで調べると1番列車のみが**South Ferry駅(終点)**行きで、2, 3番列車は**Chambers駅**で分かれて**ブルックリン方面**行きになる。

最初に来た列車に飛び乗ったが方向が逆だったことに気づき、すぐに下車し乗り変えた。



座って地下鉄MAPを見ていると、急行(express)があることに気づいた。隣の女性に訊くと今乗っている電車は各停(local)とのこと。急行に乗り換えようと再び下車して1番列車を探したが見つからない。ホームにいたOLらしき女性に訊くと「**South Ferry駅**行きの列車に**express**はないが2, 3番列車にはある」という。早速、急行に乗り途中で各停に乗り換えた。ただ、距離が短いので各停で十分だった。

列車は10時過ぎに**South Ferry駅**に到着した。歩いて**バッテリーパーク**に来たらまさかの長蛇の列だ(写真下)。200人以上は並んでいる。急いでもしょうがないので、近くのスターバックスでコーヒーを飲んでから行くことにした。



店に入り、先ずトイレ(Rest Room)に行こうと入口近くに来ると、後ろから「Hey!」と声がかかった。振り向くと5、6人の客がトイレのために並んでいたのだ。(僕は彼らが注文するために並んでいると思っていた)彼らと目が合っ  
て「そういうことか」とお互い頷いた。

アメリカは列の並びにとっても厳しいというかモラルが高い。以前、シスコの観光地の露店(スナックやドリンク)でレジの列から少し離れた所に居たら、家族連れの父親がわざわざ「Are you in line?」(並んでいるんですか?)と訊いてきたことがある。

1時間以上待つようやく乗船した。甲板に出ると少し寒い。見渡すと雲は多いが、青空も見えて視界は良好だ。遠くに自由の女神が小さく見える。数羽のかもめがフェリーの近くを飛び交い、餌を手に持ち上に差し出す客もいる。振り返るとフェリーから見たマンハッタンの景観も素晴らしい。(写真下)







次第に自由の女神が大きくなってきた。

リバティ島に上陸し、写真を撮りながら歩いて1周したが30分ぐらいだ。女神像の近くにピンクの桜が咲いている。  
寒いし疲れたので、約30分待って帰りのフェリーに乗った。(どのフェリーに乗っても自由)



途中で**エリス島**に寄ったが、疲れてたので降りずに座っていると、3人の日本人の女の子が隣に座った。彼女らは高校1年生で学校の語学研修で来て、NYで3日間ホームステイしたと言う。

「君たち私立の高校だね？」と隣の子に訊くと、ちょっと彼女は躊躇したが「**MIT**の科学って知っていますか。その高校です」

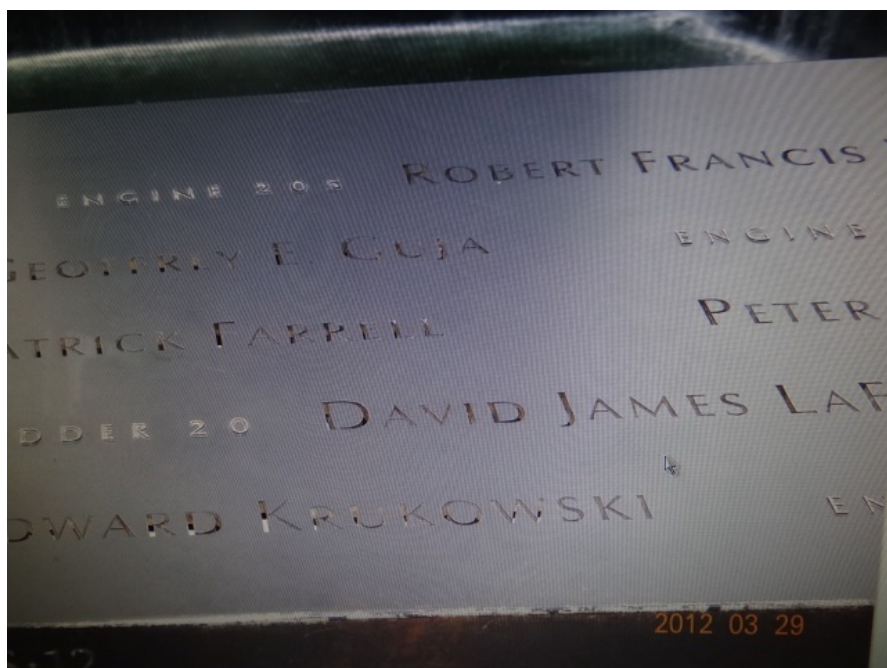
へえ。知らなかった。学校法人を持っているとは。学校は栃木県にあって、全寮制。現在、大学設立まで計画しているとのこと。僕に英語版のパンフレットを渡そうとしたが「僕は読まないから」と断った。

フェリーはバッテリーパークに着き、歩いて「**グランドゼロ**」に向かった。ちょうど「**9/11メモリアル**」のモニュメントの公開(無料)をしていたので、見学することにした。観光客も多く、ここでもセキュリティチェックは厳しく空港レベルだった。

モニュメントは大きな二つのプールで、それを囲っている大理石の上にテロで亡くなった犠牲者全員の名前が刻印されている(写真下)。



一人一人の名前を見ていくと、数多くの人がその犠牲者の名前を手でなぞったのだろう、既に少し変色したようになっている名前も見られた。ここは慰霊をする場所なので周りの雰囲気は少なからず厳肅な感じを受けた。



外に出ると腕時計がないことに気づいた。セキュリティチェックの時、置き忘れたのだ。近くにいたスタッフに問い合わせてもらったがないという。高くはなかったので諦めた。

そこから北に向かって1時間近く歩き続けて、知人に紹介された日本料理屋「[百百川\(ももかわ\)](#)」に着いた。知人からの情報では女将はかなりの美人らしい(^O^)

夕方5時過ぎにお店に入った。まだ他の客はいない。カウンターの隅に座ると感じのいい女性が出て来た。彼女が女将と思ったが違った。名前を「Kさん」と言った。知人の名前を出すとても懐かしかった。

僕は先ずビールと料理二品頼んだ後、渡米して初めて日本酒を小さめのグラスに3杯飲み、結構、いい気分になった。時間とともにお客が増えてきて、満席状態になった。やはり日本人が半数以上だ。

女将は用事があるということで、9時過ぎに顔を出した。噂どおりなかなかの美人だ。僕が知人と知り合いだと知って女将もとても喜んでくれた。帰り際にお店を訪問した証拠にと、女将と一緒に写真を撮った。飲み過ぎたせいかな顔が真っ赤に写った。

店を出て「[Port Authority Bus Terminal](#)」まで歩き、切符を買おうと自販機にお金を入れたが上手くいかない。隣の人に訊こうと横を見ると、運良く25歳くらいの日本人の女性だった。彼女に教わりながら切符を買い、方向が同じだったので、そこから一緒に歩き、バスに乗り、僕が下車するまで話をした。

彼女は両親の仕事の関係から1才からずっとアメリカで住み、現在アメリカの会社で働いている。両親は最近帰国したという。小柄でとてもチャーミングで利発そうな女性だ。日本人学校に通っていたせいか、まったく普通の日本人と変わらないきれいな日本語を話した。

僕は「いつもこんなに遅いの」とか「あなたのようなネイティブスピーカーでも聞き取れないことってあるの」とか、「多民族国家は大変だなあ」とか取り留めのない話をした。

彼女「[MITSUWA](#)って知っていますか？」

僕「知ってるよ。以前、友人と行ったよ」

彼女「あそこは日本人はあまりいないですよ...」

と言うと間もなく、バス停に着いたので、僕は後ろ髪を引かれる思いで下車した。

残念。もう少し話したかった。

時計の針は10時近くを指している。携帯が鳴った。友人からだと分かったが既にマンション内だったので出なかった。友人宅に入ると、帰りが遅いので心配して電話したとのこと。友人に今日の出来事を話しているうちに酔いが回ってきて、そのうちに眠りについた。

## 10.1 NY近代美術館 (MoMA)

3月30日(金) 晴れ★

今朝は昨夜の酒の影響もなく、7時過ぎに起きた。

友人は今日、帰国するための引越し作業を済ませた後、市内のホテルで宿泊し、明日日本へ発つ。

9時半過ぎに業者3人が来たので、「帰国したらまた会おう」と握手をして別れた。

友人宅を出て財布の中身を確認すると、20ドル札のみでコインがない。乗り慣れないバスでお釣りをもらうというリスクを避けたいので、引き返し、友人に4ドル(日本では使えないφ25コインで16枚)をいただき、再度、友人宅を後にした。

今日はNY近代美術館を鑑賞した後、ホステルにチェックインする予定だ。

バスに乗り終点「Port Authority」で降り、ブロードウェイを抜けてNY近代美術館に着いた。

(The Museum of Modern Art, New York ; 通称「MoMA」1929年設立)



MoMAでは4時間近くかけて観て回った。MoMAは前衛的な作品が主流を成すが、ピカソの「泣く女」「少年」、ゴッホの「星月夜」、アンリ・ルソーの「夢」「眠るジプシー女」(写真左下)、シャガールの「私と村」等々、巨匠の有名な作品も多く、予期せぬ作品との出会いに驚いた。



心行くまで作品を観て、写真を撮った後(フラッシュを使用しなければOK)、遅い昼食をとるた

め外に出た。タイムズスクウェアの中心にあるピザの店でビールと一緒にピザを食べた。約\$9だった。

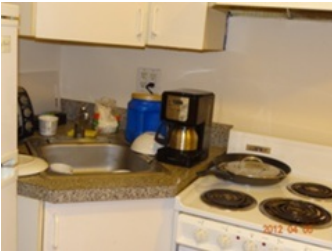
歩き疲れたので、ホステル「Times Square Guest House」で休むことにした。事前に場所を下見していたので、すぐに見つかると思ったが、例の汚い入口の建物がどこにも見当たらない。

今日はホステルのHPに記載されていた住所で探したのだが、そこにあったのは道路から階段を数段上がった、ちょっとしゃれた建物だった。

「一体どうなってるのだろう」と住所を確認すると、HPの住所と渡米前に自宅に送られてきたメールに載っている住所が異なっているのだ。今度はメールに載っていた住所でホステルを探し、やっと見つけた。こっちは先日下見した建物だった。

さて、どう切り込もうかと考えていると、入り口から韓国系の男が出て来て目が合った。彼がメールを送ってきた「Kim」だと瞬時に分かった。

彼は笑顔もなく「イージーSatoか?」と訊いて来たので、「Yes. Eiji Sato」と答えると「中に入れ」と案内された。中に入ってすぐ彼に「ホステルの住所を変えたの?」と訊くと、何のこともわからないというキョトンとした表情だったので、「まあいいか」とそれ以上訊くのはやめた。



ドアに「1RE」と記された部屋に入るように促されたが、このホステルに対する不信感が拭いきれていなかったので、

僕「I want to check the room」

彼「Ok. I'll show you the room」

と言い、階段を上り始めた。

(本来は「Could you show me the room?」と丁寧に言うべきだったのだろうが、つい粗雑な表現をしてしまった)

部屋は3階だった。部屋番号「3RE」の鍵を開けて中に入ると、2人先客がいた。室内は予想外に明るく小奇麗な部屋だった。冷蔵庫、電熱器、電子レンジ、コーヒーメーカー等必要な家電設備も揃っていて(写真上)、バスルームも問題なさそうだ。



ロッカーも一人にひとつ割り当てられている。彼らに「Hi」と挨拶をして奥の寝室を覗くと、2段ベッドが3台置いてある。「ここなら良さそうだ」と思い宿泊することに決めた。

Kimと一緒に1階に戻り「1RE」の部屋に入った。部屋にはPCと小さい机と二段ベッドが置いてあった。

彼はまず「誓約書にサインしてくれ」と言い、誓約書を読み上げた。契約書は10項目近くあり、「物を壊すな」「友達を泊めるな」「他人に迷惑をかけるな」等々という内容で、「違反したら警察に通報する」というものだった。

話をしているうちに、Kimは愛想は決して良くないが、しっかりした男だと感じた。僕はサインして、5日間の料金\$222(1泊約\$45)を支払い、部屋の鍵を受け取った。

6人部屋とはいえ、マディソンスクエアガーデンのすぐ近くで1泊3,600円は破格だ。昨年2月に10数軒、NYのホステルを調べたが、大半は年齢制限があり、気に入ったホステルは見つからなかった。

このホステルは年齢制限がなく、ロケーションも良かったので予約したが、まさか5連泊で予約が取れるとは思ってなかった。それが逆に心配になり、このホステルを紹介しているサイト「HOSTEL TIMES」に「何か悪い情報はないですか?」とメールで問い合わせたところ、「特にない」との返事が返ってきた。

再度、3階に上がり、鍵を開けて中に入ると先ほどの青年が、1人は電話をしていて、もう1人は寝室のベッドで仰向けで本を読んでいた。

僕は「Hi!」と言って挨拶を交わし、Kimに割り当てられた寝室の入口正面のベッド上段に荷物を置いた。今日からこのベッドで5日間過ごすのだ。

夕食を食べるためにホステルの外に出た。簡単に食事を済ませ、ホステルに戻ると二人がテーブルで打合せをしている。邪魔をしないように再度挨拶を交わして、寝室に入り、日記を整理して寝た。

当初、NYの中心街にあるホステルの6人部屋に一体どんな客が泊まるのかが、最大の不安要因だった。「変な客とは一緒になりたくないなあ」と心配したが、この二人の青年を見て、その不安は払拭された。彼らのごく普通の若者だった。

## 10.2 メトロポリタン美術館

3月31日(土) 雨☔ → 曇り☁

ホテルを朝9時に出て、マディソンスクエアガーデンに近い「[ROASTOWN](#)」という店でローストビーフのサンドイッチを頼んだ。

黒人男性の店員が何か訊いてきたが聞き取れない。答えられないでいると、彼は黙って料理を始めた。「何を訊いたんだろう？」と考えていたら急に閃いた。「Hot or Coolだ」

僕 「さっき訊いたのは Hot or Coolなの？」

店員 「Yes」

僕 「Cool, please」

と言うと、彼はオープンで温めていたローストビーフを取り出して、冷たいローストビーフをパンに挟み始めた。そうか、温かい方で作り始めていたんだ。ちょっと申し訳ない気がした。

出来上がったサンドイッチを受け取り、ドリンクを選び支払を済ませて2階上がった。

広々としたフロアにテーブルが10数台置かれていて、数人の客が食事をしている。大画面のテレビが数台壁に掛けられ、NBL(バスケットボール)の映像だけが流れていて、静かな雰囲気だ。ゆっくり食事をした後、セントラルパークの東側に位置する[メトロポリタン美術館](#)に向かった。

「[BDFM線](#)」の34st駅から地下鉄に乗ったが、通過する駅の名前を見て逆方向だと気付いた。

「またやった」と悔やんでいる僕に傍に座っている黒人のおじさんが笑顔で声をかけて来た。

おじさん 「何処に行くんだ？」

僕 「セントラルパーク。電車を間違えた」

14st駅で電車を降り、ホームでガイドブックを見ていると、あのおじさんが乗車口から身体を出して「There! There!」と指さして叫んでいる。僕は「OK!」と手を上げてそれに応えた。いい人だなあ。

14st駅から引き返し、目的地の「[Colombus\(59st\)駅](#)」で降りた。階段を上り、地上に出ると風が強くて寒く、小雨も降っている。ショッピングビルに避難し、しばらく様子を見てみると、雨も止み出かけることにした。ただ、天候が悪いので道順を確実に覚えてから出かけようと、通りかかりの男性に声をかけた。

男性は中年のサラリーマン風。地図を見せると、ビルの外を指差し、

彼 「目の前がセントラルパーク、これがこの道...」

僕 「地図のこの道はどれですか？」

彼 「Ok! Let's get out.」(外に出よう)

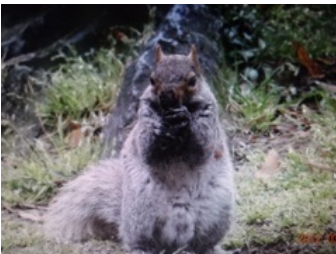
ビルから出て、分かり易く説明をしてもらい、お礼を言って別れた。テキパキとした、とても感じのいい人だった。

[セントラルパーク](#)(南北4km、東西800m)を通して美術館に行こうと決め歩き始めた。

「ここがあのかセントラルパークか。」天候のせい人影はまばらで、静かな雰囲気さえ感じる。数人のジョガーが後ろから僕の横を走り抜けて行く。



小鳥も近くにいる。数匹のリスが俊敏に動いている。  
2~30分歩いただろうか、グリーン色したログハウス風の土産物店に着き、そこでストロベリーフィールドのマークのTシャツを1枚買い、引き続き目的地に向かった。



[メトロポリタン美術館](#)(※)の前は観光客で賑やかだった(写真下)。クロークで荷物を預け、チケット渡すとそれと引き

換えに青い小さなバッジをくれたのでそれを胸に付けて入館した。

(※)(略称The Met。絵画・彫刻・装飾品など300万点の美術品を所蔵)

建物の中はとにかく広い。絵画は勿論、エジプトで発掘された貴金属、中世の甲冑、西洋の彫刻、日本の合戦を描いた屏風等、様々な美術品があり数え上げたらきりが無い。僕の好きなロダンの作品も数多く目にした。これでは一日で全てを観るのは不可能だ。美術館には4時までいた。



美術館を出て、「ストロベリーフィールド」※に向かった。

(※1980年に射殺されたジョン・レノンを偲んで、オノ・ヨーコが造ったモニュメント。72St.の入口近くにある。中央にIMAGINEの7文字が刻まれている)

公園を東から西へ横切って反対側の道に出たが、案内板も見当たらない。近くにいた黒人の馬車の車夫に訊くと「そこに人が集まっているところだよ」と指差した。

そこには7、8人の観光客がいて、記念写真を撮ったり、献花している客もいた。僕は明るいイタリア系の青年にお願いして写真を撮って貰った後、夕食を取るために地下鉄でホテルに戻った。



Penn St駅で降り、お店を探しながら歩いていると、赤提灯が目に入った。

店の前に来ると「Sushi Osaka」という和食の店だった。「ここにするか」と中に入るとカウンターには板前が二人、接客している男が一人居たが、いずれもアジア系だった。

メニューを見ると、「Edamame(枝豆)」「Oshitasi(おひたし)」「Agedashi Tofu(揚げだし豆腐)」と期待できそうな和食の料理名が並んでいる。ここは思った以上に本格的？な和食が食べられそうだと思う、「Best of The Best! (9%)」という、いかにもこの店一押しと思える名前の握り寿司を頼んだ。

間もなくして、出てきたのは皿にマグロ二貫と穴子二貫を交互に並べた四貫の握り寿司だ。だが、全てのネタに穴子の甘いタレが塗ってある。マグロが台無しだ(>\_<)。味はまあまあだと言いたいが、どれも穴子のタレの味。これで9ドルは酷い。

次にマッシュルームを甘辛に炒めたものを食べたがこれもイマイチ。

注文をとっている男に

僕 「なぜ、店名が大阪なの？行ったことあるの？」

彼 「No！」

と笑いながら答えたので、思わず僕も笑った。

僕 「君は韓国人？中国人？」

彼 「インドネシア人。もうNYに7年住んでいるよ」

と言う。明るく屈託のない男だ。

客は僕以外には6人くらいの団体客が少し離れた席に居て、賑やかに食事していたが、彼らが食事を終えて出て行く時、店員に

お客 「Thank youは日本語で何と言うの？」

店員 「アリガト」

すると、突然接客係の男が僕を指差して、お客に向かい

彼 「ここに本物の日本人がいる」

と大きな声で叫んだ。

店のスタッフは、似非日本人であり、似非日本店として商売をやっているようだ。僕は更にキリンビールを飲み店を出た。会計は締めて約\$40だった。



帰りにマディソンスクエアガーデンの側にある「[DUANEreade](#)」という名の薬局兼スーパーで、老眼鏡(20ドル)と缶ビールとつまみを買って、ホステルに帰った。

一人でリビングで飲んでいると、30才位の小柄な客が入って来た。

僕 「I'm from Japan」

彼 「I'm from France」

僕 「ビールどう？」

彼 「飲まない。2002年のW杯の時に、親戚が日本に行ったよ。明日、ワシントンDCにいる家族

に会いに行くんだ」

彼はあまり社交的なタイプではなかったので無理には話しかけず、今日はもう寝ることにした。すると、突然ドアをノックする音がした。ドアを開けると、金髪の若い女性が立っていた。

彼女 「xxさん居ませんか？」

僕 「今、部屋には僕とフランスからの客しかいないよ」

彼女 「Ok.Thank you」

と言ってドアを閉めた。

その後、隣の部屋から女性の笑い声が聞こえて来た。どうも隣が女性専用の部屋で、僕がここに来る前にその彼と知り合いになっていたようだ。多分、昨日部屋にいた二人の青年だろう。そう言えば、今夜はまだ帰って来ていないが...

## 10.3 アメリカ自然史博物館

---

4月1日(日) 晴れ☀️→雨☔️

朝起きてベッドで携帯に日記を付けていると、初日に部屋にいた青年の一人が入って来て僕に話しかけて来た。が、「まったくとした」発音で聞き取れない。

僕「I'm Japanese. I can't catch you」  
というと、下のベッドで休んでいたフランス人の彼が引き受けてくれた。

彼は10分くらい話をして部屋から出て行き、外で誰かと話している。どうもマデysonスクウェアで朝まで飲んでとても楽しかったらしい。そう言えばアルコールの匂いがする。あの「まったくとした」発音はまだ少し酔っているせいだったのだ。

僕がバスルームでシャワーを浴びていると、ドアをノックする音がして、その青年がドアを開けた。トイレを使いたいのだろう。僕が入っているのが分り、彼は遠慮しようとしたけど、「Please come in」と言うが入って来た。カーテン越しに彼との会話が始まった。

彼はオーストラリアから来ていて、故郷では農業をやっているとのこと。  
「今度、日本に行きたい」と言い、「今日はバスでチェルシーに行くんだ」とのこと。  
あとはとりとめのない会話だった。彼はバスルームを出る時に「Sorry.I'm in drink」(酔ってるんだ)と恐縮した顔をして、ちょっと頭を下げた。

僕がバスルームから出て、ベッドでくつろいでいると、また彼が入って来た。  
僕「いつ出かけるの？」  
彼「今から」  
と言い、別れの握手を求めて来た。  
僕「良い旅を」  
彼「さっきは申し訳なかった」  
と、また謝るので  
僕「No problem.」  
と応えると、リビングにいた友人の笑い声が聞こえた。

もう、11時を回っている。「僕もそろそろ出かけるか」と思っていると、新たなイギリス人の客が入って来た。40代後半か。彼はiPadに電源を入れ、熱心に何かをしている。すると我々に「1週間前に買ったiPadが動かない」という。二人で見たけど結局分からなかった。

彼はやがて出かけたので、僕も出かけることにした。フランス人の青年に「じゃあ、楽しんで来て」と握手をして別れた。彼は今日、ワシントンDCに飛び立つのだった。

今日は地下鉄で、セントラルパークの西側にある、[アメリカ自然史博物館](#)（動植物、鉱物など自然科学、博物学に関する多数の標本を所蔵。1869年設立）に行く。この博物館は、ヒット映画「[ナイトミュージアム](#)」で一躍人気が出たという。地下鉄に乗るのは4回目なので、さすがに要領が良くなり、状況によって対応できた。「習うより、慣れる」だ。



博物館に着いた。受付で「1時から『[Journey To The Stars](#)』が始まるよ」と言われた。どういう内容が知らなかったが観ることにした。開演まであと15分しかない。間に合うかなと心配したが上手く行った。

エレベータで3階まで上がると壁に25インチ位のモニターが20台近く設置されている部屋に出た。

「こんな小さいので観るのか」とガッカリしていたら、しばらくして隣の部屋にみんなが移動し始めた。中に入ると円形のドームの部屋で200席以上並んでいる。

「プラネタリウムでも観るのかな」と思ったが、いざ始まるとその素晴らしい映像に驚いた。

今までに体験したことのない3Dの世界だった。自分の身体がまるで宇宙の中にいるようだ。惑星や探索機が手に取るように近い。あっという間の20分間だった。(入場は無料)

部屋を出て、感動も冷めやめぬまま、展示室に移動した。そこは色々な動物の標本が並んでいてが奥行きのあるディスプレイがされている。この博物館の売りである恐竜の骨の展示室に入った。初めて恐竜の骨を観て「大きいなあ」というのが実感そのものだ(写真下)。時間をかけて見て回り、写真も数多く撮った。



2時間半近く観て外に出た。  
次にジョンレノンが撃たれたというダコタ・ハウスを見ようかと、歩いて72stへ向かった。約15分で着いた。  
集合住宅というのが風格のある高級マンションだ。数人が写真を撮っていた。(写真左)

次はそこから「マンマ・ミーア」が演じられている「ウィンターガーデン劇場」に行きチケット情報を得ることにした。

劇場はブロードウェイのほぼ中心にある。劇場内に入ると数人がチケットを買っていて、僕は窓口で「マンマ・ミーアの日程とか料金のパンフレットありませんか?」と訊くと、壁に表示してあるだけで、パンフレットはないという。「料金表の写真を撮っていいか?」と訊くと「OK」。一枚撮って外に出た。



それから、ブロードウェイのチケットセンターの辺りでチケットの勧誘している男に、  
僕 「4月4日に上演するマンマ・ミーアの割引チケットを今日買えない?」  
彼 「それはできない」  
そんなものかと思いつつ、昼食は近くのお店でツナのサンドイッチを買って店内で立って食べた。レジで「日本人には量が多いよ」と軽口も言えるようになった。

再度、チケットセンターの辺りに行って、同じ質問を女性の販売員にしてみた。

彼女 「できるわよ」

僕 「いくらなの?」

彼女 「\$135が\$105よ」

僕 「\$70のチケットはいくらになるの?」

彼女 「それは劇場で買えば」

つまり、彼女らは安いチケットを割引くのではなくて、プレミアムチケットを割引いて売って

いるのだ。いずれにしても、鑑賞日当日に買うことにした。

雨はパラパラ降っていて止みそうもないので、ホステルに帰ることにした。途中で缶ビールとジュースを買った。

ホステルに着くとイギリス人の男性が戻っていて、ipadが直ったと喜んでた。

彼の名前はマークといい(写真の正面を向いている男性)、1960年代の黒人の音楽(Soul Music)を聴くのが趣味で、今までに買ったレコード(ドーナツ版)を持っていた。しかも、レコードプレーヤーまで持ち歩いているではないか。



僕にレコードを次から次に聴かせる。

僕 「これらの曲が何か昔のことを思い出させるの？」

彼 「聴くととてもリラックスするんだ」

すると、そこに新しいお客が来た。イギリス人で20才の大学生。

マークと二人で話し始めたので、僕は退散した。

ベッドで休んでいると、ホステルのマネージャのKimが現れた。

僕 「滞在をもう1日延長したいのだけど」

彼はスケジュールを確認して「OK」と言った。

7時過ぎにまたお客が来た。40代？の利発そうな男性だ。

僕はテーブルでビールを飲みながら彼と言葉を交わした。

僕 「I'm from Japan」

彼 「I'm from France. 奥さんは一緒じゃないの？」

僕 「She is in Japan」

彼 「Me too」

とお互いに笑った。

彼はアメリカは初めてでNY観光をした後、バスで1日ごとに、ワシントンDC、フィラデルフィア、ボストンに行くと言う。名前をGuy(ガイ)といった。彼はバスルームから出て来ると、

「ビールを一杯飲みたいのだけど」

「ビールはもう空っぽなんだ。まだ、店は開いてるよ」

「だったらいいよ」

明日は少し多めに買っておくかな。

10時半には僕を除く3人もベッドに入り消灯状態。なんと健全なホステルなんだ。僕はリビングのテーブルで一人日記を付け、12時近くになったので、ベッドに入った。

## 10.4 ブルックリン橋～ジャパントウン

4月2日(月) 晴れ ☀

今朝は5時過ぎに起き、充電した携帯で日記を整理した。6時30分頃にガイが起きて来て、シャワーを浴びて、7時に出かけた。出かける際に、お互いに「See you later」と言って握手を交わした。僕は宿泊代を払うために1時にホテルに戻らないといけないのだ。

「あ～腹減ったなあ」時計は既に9時を回っている。朝食を食べに行こうかな。でも、ちょっと寒し出かけるのに躊躇する。カーテンの隙間から外を覗くと、意外にも日が差している。今日は天気は良さそうだ。そろそろ出かけるか。

結局10時過ぎにホテルを出て、以前行ったことのある「ROASTTOWN」に入った。ここは明るくて2階席が広くて居心地がいい。今日は「grilled chicken sandwich」とジュースを買って約\$11。やはり高い。量は半分で十分なんだが…。半分だけ食べて残りは昼食にするか。

今日は「ブルックリン橋」を渡ることにした。この橋はマンハッタンの東側を流れるEast Riverに架かった米国で最も古い吊橋で1883年完成したものだ。

地下鉄の「ACE線」で一本だったが乗り過ごし、East Riverを渡ってしまった。しかし、逆にこれが良かった。間違えた駅(High Street - Brooklyn Bridge駅)の方が橋に近いし、渡り終えても戻って来る必要もないからだ。

地上に出た。ブルックリン橋は近くに見えるのだが道が分からない。何人かに訊いて、かなり迷った後、やっと橋に繋がる「Walk Way」に辿り着いた。階段を上り橋の上に出るとそこから見たマンハッタンも実に素晴らしい。(写真下)



NY方面から歩いて来た若いカップルに写真を撮って貰った。写真をお願いするにはカップルが一番好意的だ。なにか法則でもあるのか? このカップルは気を利かせて縦と横2枚撮ってくれた。しばらく歩くと中国系の女性が橋の上でキーホルダーを売っていた。「カワイイ」デザインで思った以上に安く(1個1ドル)、お土産に10個買った。

橋を渡り終えて昼食を食べにチャイナタウンに行った。そこで中華の大衆食堂に入り、ご飯とおかず4品選んでたった4.75\$。しかも、白米が驚くほど旨かった。多分日本米だと思う。

夕方5時近くなり、また急に眠くなってきた。地下鉄で帰ろうと、ホステル行きの駅を探しながら歩いているうちに、ジャパントウンが近くにあると知り、覗いて見ることにした。

ジャパントウン街を暫く歩くと似非日本人の店が多いと感じた。偶然、「大将」という居酒屋の前で若い日本人の店員が休んでいたので少し話をした。彼はこちらに来て3年になるという。是非今から店に来て欲しいというので入ることにした。

店内は日本の居酒屋そのままの雰囲気だ。僕は焼き鳥が焼かれているカウンターの右隅で、耐ハイで焼き鳥を食べながら日記を付けていると、5才くらいの女の子を抱えた黒人女性と白人女性が僕の隣に座った。いずれも30代くらい。彼女達はビールと日本酒(大関)を飲み、餃子が美味しいと談笑している。暫くして、隣の白人女性が話しかけて来た。

彼女 「Japanese?」

僕 「Yes」

彼女 「結婚してるの?」「結婚して何年なの?」「子供はいるの?」「幸せな結婚なの?」

と個人情報に属する事柄について次々と訊いて来る。初対面で挨拶をした直後に交わす会話とは日本では考えられない。これがアメリカンスタイルなのか。

彼女は一通り質問をした後、「私は離婚したの。でも、彼女は幸せな結婚なの」と友達を指差す。暫くして、友人のご主人と息子さんが入って来た。ご主人は白人系で、息子さんは黒人の風貌だった。

僕は立ち上がり、彼らと挨拶を交わした。ご主人は両手で僕の手を握り丁寧な挨拶をした。息子さんは18才で既に190センチ近くある長身だった。

ご主人達はすぐに出て行き、再び彼女との会話が始まった。

彼女 「私はカレッジで広告学を勉強して、今、病院で働いているの。生まれはNYだけど、今は田舎に住んでるの。あなたは何歳なの?」

僕 「Guess me.(当ててみて)」

彼女 「う〜ん 42才」

僕 「そう。今日は42才」

と言うと、彼女は気の抜けた笑いを見せた。

その後も、個人情報に属する質問を受けながら、最後に彼女は「私はリズっていうの」と言い、紙に「Liz Esquilin」と名前をメモして、僕にくれた。

彼女にセカンドネームを発音できるか訊かれたので「エスキリム」と答えると、友達の方を見て「Perfct!」と言った。僕は名前と電話番号を訊かれ、写真を撮られて、彼女のスマホのアドレスに登録された。「今度、いつアメリカに来るの?いつ電話してもいいから」と言われたが...。( ^\_^ )

友人のご主人が再度現れ、彼女達にご馳走したこともあったのか、とても感謝していると言われ、ちょっと恐縮した。別れ際にリズとハグし、その友達とはハグとキス(と言っても頬と頬だが)をした。ジャパントウンでは思いも寄らず楽しい時間を過ごせた。

ホステルにビール2缶を買って帰った。ガイに飲まないかと訊くと、「もうすぐ寝るからいい」と言った。20才の大学生も飲まないの、一人で飲みながら、3人で1時間ほど話をした。

話題は言葉(欧州では英語は言語のひとつに過ぎない)とか、サッカー(プレミアムリーグが一番面白い)についてだった。

僕はリスニングに苦しみながらも、時々、テーマを振ったりして会話を楽しんだ。会話も終わりかけた時、新客が入って来た。彼は一人ひとりに自己紹介して全員と握手を交わした。浅黒いちょっと異色な感じのする30代の男性だった。彼は我々の話には入って来ないで、一人でiPadをいじっていた。

ガイが寝るという。

ガイ 「Good night」

僕 「Have a good dream」

ガイ 「I will try」

と彼らしい返事だった。それから、僕もすぐにベッドに入った。



## 10.5 グッゲンハイム美術館

4月3日(火) 晴れ ☀

今朝は早く起きてシャワー浴びた。今日は「ヤンキースタジアム」と「グッゲンハイムミュージアム」に行く予定だ。これで「NY City PASS」のチケットは全て使い切ることになる。

ヤンキースタジアムはセントラルパークの北東に位置し、ハーレム川を渡りブロンクスに入ったところにある。地下鉄の駅名は文字通り「Yankee Stadium駅」。スタジアムはそのすぐ傍にある。

駅に着き、近くのマクドナルドで朝食を取った後、スタジアムに向かった。シーズンオフで中に入れず、スタジアムを一周した後、「TEAM STORE」という土産店でTシャツを買った。入店時に、ウェストバックの中をチェックされたのには驚いた。



その後、グッゲンハイムミュージアム（現代美術専門の美術館）に寄った。ここは建物自身が「かたつむりの殻」のようなユニークで人気のある美術館だ。

建物の中央が大きな吹き抜けになっていて、観客は螺旋形の廊下を歩きながら作品を鑑賞する。写真は一切禁止で、下の写真でさえ撮影後、係りに注意された。

カラフルなブリキのドラム缶がつぶれたような作品がいくつも並んでいる。僕には理解できない。1時間余りで外に出た。



外に出ると路上で絵画を売っていて、覗くと一枚気に入った絵が目に入った。  
店主は白人青年だった。

僕 「How much？」

彼 「\$20」

僕が迷っていると

彼 「2枚で\$30でいいよ」

僕 「1枚\$15でどう？」

彼 「OK！」

僕 「Cashが\$13しかないんだけど」

彼 「OK！」

値段は交渉次第だ。記念に1枚買った。

昼食にピザを食べた後、ブロードウェイに向かった。

途中、偶然ロックフェラーセンターの前で野外のアイススケート場を見た(写真下)。



しばらく歩くとまた路上で絵画を売っていたので、覗いたら、ブロードウェイ中心街を3D風に描いている作品を見つけた。

ガラスケースに入っていて、\$20と安い。本当に買おうか迷った。でも、ガラスなので割れると困るし、荷物は作りたくないし。お店のスタッフ(27才位の白人女性)と雑談していると彼女が突然訊いてきた。

彼女 「Do you know "カワイイ"？」

僕 「Yes, off course」

彼女は僕の帽子のバッジを見て、日本人だと判り訊いてみたという。

僕 「For example, You are "カワイイ"」

彼女 「Thank you」

と言って笑った。結局、絵を買うことは断念して「Sorry」と言って店を離れた。買ってあげれば良かったかなあ…。

再度マンマ・ミアの情報を仕入れにチケットセンターに行った。すると、チラシを配っている女性が結構いい席が60%と言う。4月4日(明日)限定だ。「安い！明日、観に行くことに決定！」チラシをもらい、ホテルに帰った。

部屋にはガイがいた。彼は今日、[チャイナタウン](#)に行って来たと言った。

ガイ 「Do you know コンフィシャス？」

僕 「コンフィシャス...？ I don't know. スペルを教えてよ」

彼は紙に「[Confucius](#)」と書いた。「Confucius」なんて初めて見る単語だ。

ガイ 「3000年前にいた中国の人物だよ。知っておいた方がいいよ」

僕は少し考えて、「始皇帝」と紙に書いて彼に見せたがキョトンとしていた。そりゃそうだ。

他に思い浮かばないので、「New wordだろう」と言うので笑った。

僕 「後で調べておくよ」

と言うと彼はすぐにスマホで調べて僕に見せた。それは「[孔子](#)」だった。

僕 「日本では良く知られているよ。彼は詩人だし哲学者だよ」

というと、彼は珍しく黙って聞いていた。

(「Confucius」はヨーロッパに伝わった「孔夫子」を音訳した「コウフシ」から由来したもの。「夫子」は「先生」の尊称)

彼が夕食を食べに出て行ったので、僕も出かけた。「良い店ないかなあ」としばらくホステルの周辺を歩き回り、「[ZoobZib](#)」というタイ料理の店を見つけ、中に入った。

スタッフはアジア系で、笑顔で注文を取りに来たのはフィリピン人女性だった。アジア人同士だと話しやすい。サッポロビールと「[SPRING ROLL](#) 3pcs(エビ春巻き 3個)」と「[MOO YANG](#)(豚肉の甘辛炒め)」を食べた。スパイシーでとても美味しかった。更に、タイビール2本を飲み約40分だった。

ホステルに戻るとリビングには誰もいない。「皆さんもう寝たのかなあ」と思っていたら、新客が入って来た。ヒゲをたくわえた30代のいい男だ。名前は[ミラン](#)(Milan)。

僕 「ビールどう？」

彼 「飲むよ」

僕 「国はどこ？」

彼 「\*\*\*\*\*」

彼の出身国が聞き取れない。何度聞いても「ニュージーランド」に聞こえる。紙にスペルを書いてもらってやっと分かった。「ネーデルランド」(Netherlands)。オランダだった。

彼はスマホの「Google Earth」で自宅まで見せてくれた。水辺に建っている白い壁と木造の黒い骨格のコンストラクションが綺麗なオランダらしい家だった。

彼は1週間カリフォルニアをバイクでシスコからロスを走り回った後、今日飛行機でNYに着いたという。気さくで話し易く、しかも節度があり好感が持てた。

僕はシスコからシカゴまで寝台列車だったというと、

「You are crazy！」

と笑うので、

「I think so」

と応えた。

彼は日本に行きたいが、旅費が高くて行けないと言った。やはり円高の影響は大きいのだ。

缶に残っていたビールを彼のコップに全部注ぎ終わった頃、音楽好きなマークが帰って来て、次第に賑やかになって来た。僕は聞き役になっていたが、疲れていたの先に寝室に入った。やがて彼らも静かになった。

## 10.6 ミュージカル鑑賞 (MAMMA・MIA!)

---

4月4日(水) 晴れ☀

7時に起床。リビングに行くともミランとガイがいた。マークと「異色な男」は既に出かけていて、イギリスの大学生はまだ寝室だ。

僕は彼らと話す時が一番居心地がいい。彼らがネイティブではないから、彼らの英語が聞き易いせいもあるのかも知れない。勿論、人柄が良いということは言うまでもないけど。

髭のミランが「もう一杯コーヒーはどう？」と僕のカップにコーヒーを注いでくれた。予期せぬ気配りに少し驚いた。それは、昨夜彼に缶ビールをご馳走した時、その多くを彼のコップに注いだことへのお礼だと感じた。

しばらくして、ガイが「自由の女神からハドソン川辺りのクルーズツアー」(3時間\$38)に出かけた。ミランはバイクを借りてマンハッタンをウロウロすると言う。

僕 「怖くないの？」

ミラン 「怖くないよ。バイクはもう20年以上乗っているからね」

彼がドアを開け出かける時に、「Concentration! (集中だ!)」と言って見送った。笑っていたが伝わったのかな。

昼近くにイギリスの大学生が起きて来た。彼はマイペースだ。シャワー浴びて先に出かけた。僕もシャワー浴びたあと、「マンマ・ミーア」のチケットを買うために、ブロードウェイのチケットセンターに向かった。

昨日もらったチラシを持って、チケットセンターの窓口に並び順番を待った。窓口でチラシを見せて「この59ドルのチケットが欲しい」というと、「ここはでは扱ってない」と断られた。

どうなっているんだこのチラシは(一一;) 改めてチラシを見ると小さい字でいろんなことが書いてある。59ドルという安いチケットに席のグレードの記載はない。つまり、このチラシはチケットセンターとは何の関係も無かったのだ。

(チケットセンターの周りで何人かの男女がチケットを斡旋しているが、彼らとチケットセンターとは全く関係がないので要注意)

もう時間もなかったので、チケットセンターで直接購入することにした。

再度、窓口に行き、84ドルの席を選び、「Good seat, please」と言い、「I trust you」と付け加えた。スタッフの男性は「Yes」と言い、チケットを差し出した。



「マンマ・ミーア！」が演じられる「ウィンターガーデン劇場」はチケットセンターから歩いて数分の所にある。  
(MAMMA MIA : ABBAのヒット曲22曲から構成されたミュージカルで世界的に大ヒットした。MAMMA MIAはイタリア語で「なんてこった!」という意味。2008年にメリル・ストリープ主演で映画化された)

劇場に向かって歩いて行くと、正面に大きく「MAMMA MIA !」と書かれた看板が目に入った。

開演は2時だが1時過ぎには、既に多くの観客が劇場の周りに集まっている。

入場して案内された席はオーケストラ席で前から5列、左から6番目で、出演者の顔の表情もはっきり判る良い席だった。場内は文字通り満員だった。

しばらくして、日本語のオーディオガイドのサービスがあるとアナウンスがあり、借りに行くことにした。担当者の女性に訊くと、\$10だという。「無料じゃないのか」(…)でも、場面の状況が分からないのでは情けないので、借りることにした。パスポートの写しを出すと「クレジットカードを預かる」というので、渋々手渡してヘッドフォンを受け取った。

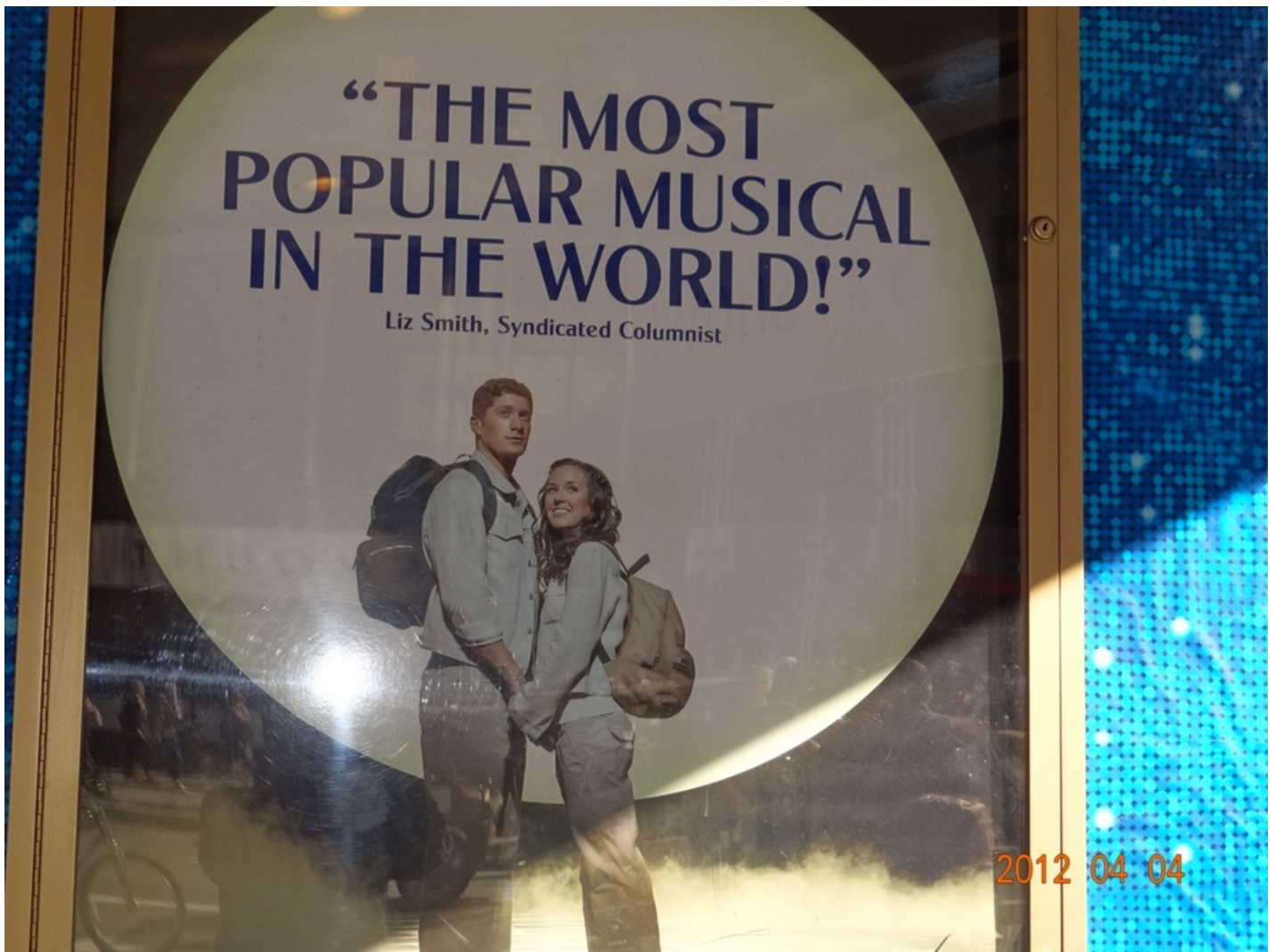
ベルが鳴り、幕が開いた。ガイドのおかげで、ストーリーには付いて行ける。  
実は「マンマ・ミーア」を選んだのは、英語が聞き取れない不安にあった。だったら、好きなABBAの曲が20曲以上聴けるこのミュージカルを選んだのだ。それまでストーリーは全く知らなかった。

初めてのミュージカルでその歌声とダンスの素晴らしさに感動した。フィナーレで出演者が全員で「ダンシング クイーン」を歌い、最高に盛り上がり幕は降りた。

「マンマ・ミーア」の詳細は記さないが、ほんとに「素晴らしい」の一言に尽きる。特に歌唱力は圧倒的だ。ダンスも演出もいい。心から楽しませてくれた。これこそエンターテイメントだ。84ドルは決して高くはない。

ただ、近くに座っていたイタリア系?の70代?のオヤジが袋からポリポリ、豆のようなスナックを食べる音には参った。何度、注意をしようと思ったことが...

おそらく、二度と観ることはないと思い、記念にオリジナルのCD(\$25)とプログラム(\$20)も買ってしまった。



外に出て、感動の余韻に浸りながら食事をしようと歩き出した。途中でビールが飲みたくなり、マディソンスクウェアガーデンの側のいつものスーパーで缶ビール1本買った。

近くの広場でベンチに腰掛けてビールを飲んだ。少し離れた所にエンパイアステートビルが見え、展望台の人影やカメラのフラッシュが分かる。

今、こうしてNYの真中において、人の流れや建物を観ている時間に幸せを感じている。でも、NYに着いた頃とは違い、このNYの象徴であるエンパイアステートビルを見ても、さほど心は動かなくなった。もう十分見たということなのか。そろそろNYに別れを告げてもいいのかも知れない。まだ、日は暮れては無いのだが、ビルの展望台の左側に白い月が出ている。絵になるけど、もう写真は十分だろう。

夕食は昨夜と同じタイ料理の店にした。春巻きと鶏肉のグリルを頼んだ。が、普通のフライドチキンが出てきた。ガッカリ。でも頑張って完食した。

帰りにスーパーに寄ったらアサヒ「スーパードライ」を見つけた。アメリカに来て初めて目にした。1ℓくらいある日本では見たことのない大きい缶ビールだ。**\$4.5**だった。

ホステルに着くと今朝居た3人が既に帰っていた。皆に「スーパードライ」の美味しさを語り、「Try it. (飲んでよ)」と勧めると、みんな喜んで飲んでくれた。が、反応は微妙だった。

アルコールについて感じたことだが、先ず、アメリカ(NY)では酔った人を全く見かけなかった。ホステルでも積極的に飲む人は少なかった。(ただ、あのオーストラリアからの若者は朝帰りだったが)

アメリカでは人前で酔うことを嫌い、酔っ払いを軽蔑するという。日本では酔っ払いに対する許容限度が大幅に大きい。やはり文化の違いなのだろう。

4人での会話が始まった。というよりもガイとミランとの会話に僕らが時々しゃべるだけだ。イギリスの大学生は話を振られればしゃべるけど、自分からは何も言わないで聞いている。

(写真、左からミラン(蘭)、ガイ(仏)、20才の大学生(英))



話題はサンフランシスコ、NYの交通システム、英語、トイレ等多岐にわたる。

僕 「あなた方は英語が上手いんだけど日常で英語を使っているの？」

ガイ 「僕は使わない」

ミラン 「僕は仕事で使っているよ。映画は翻訳していないものを観るようにしている」

僕 「マークが「Sunday」を「サンダイ」と発音していたが、あれはオーストラリア人特有の発音 なの？」

ミラン 「それは大した違いじゃないよ」

との答えで、話題にもならなかった。

僕は自分自身を含め日本人の英会話能力の無さを語り、「このガイドブックでさえ、表紙のタイトルが日本語で「アメリカ」なんだ」というとみんな笑っていた。

それから「NYのトイレ(Rest Room)事情は本当に厳しい」ということで意見が一致した。

公衆トイレは無いので、駅等の公共施設かホテルか飲食店を探すしかない。飲食店はトイレの無い所もあるし、トイレだけだと貸さない(鍵が掛かっている)場合も少なくない。治安のためだと言うが、本当に困る。

(外出すると絶えずトイレの在り処を意識する必要がある。あのダンキンドーナツ店でさえトイレが無く、近くのマクドのトイレを借りてくれと言われた)

最後に、みんなで記念写真を撮った(写真上)。

ところで、 Hostel 宿泊中での「貴重品の管理」をどうしようかと考えていたが、まったく心配なかった。今回出会った連中は常識もあり良識もある連中だった。

僕は外出している間は、さすがに貴重品(財布、パスポート、カメラ、携帯)は身に付けていたが、他のものはバックパックに入れて、ベッドの上に置いてきた。他の連中も同じだった。カメラや携帯電話の充電は各自が寝る前にセットし、朝起きて持って行くという形だった。

ついに明日は帰国する日だ。





## 11. 帰国

4月5日(木) 晴れ ☀

朝早く目が覚めた。今日は、JFK空港から午後2時発成田行きの直通便で帰国する。

JFK空港へは一番安い交通手段である地下鉄(\$2.25)と「[エアトレイン](#)」(\$5)(地下鉄とJFK空港とを結ぶモノレール)を使って約1時間だ。10時にここを出れば十分間に合う。

リビングに行くとき既にマークが起きていてiPadで作業をしている。多分、音楽関係の情報を入力してるのだろう。「Good morning」と挨拶し、コーヒーを入れ、テーブルで日記を整理した。日記の整理はあつと言う間に時間が過ぎる。

しばらくすると入力作業を終わったマークが側に来て、「僕はこれから寝るので」と別れの握手をした後、寝室へ入っていった。



ガイとミランも起きてきた。ガイはシャワーを浴び、コーヒーを入れて、僕の向かいに座った。

彼は今日、バスで4時間かけてボストンに行き、1時間観光して帰って来るという。明日は、バスでワシントンDCに行くとのこと。近くから中国系の安いバスが出ているらしい。そのうち、ガイも寝室に入ってしまった。

ミラン 「彼はクレージーだよ。4時間かけて行って1時間だけ観光して帰って来るなんて」と  
小さい声で言った。

僕 「でも、それ彼のポリシーだろ」

ミラン 「そうだけど...。まあ、彼はフランス人だからね」

僕はミランを指差して笑った。そうか、欧州圏でもいろいろあるんだなあ。

そういえば、二日前に宿泊して、我々とは話をしていない、ちょっと「異質な男性客」のことが気になり、ミランに訊いてみた。

僕 「彼はどういう人か知ってる？」

ミラン「彼とは話をしていないけど、発音を聞くとポルトガル訛りがあるから、ブラジル人かポルトガル人だと思う」

確かに見た目はブラジル人かなと思った。彼は、ほとんど部屋に居なくて、小包のような荷物をロッカーいっぱい詰めていた。一度、朝早く帰ってきたので、「コーヒーでもどう？」と話しかけると「僕はこれから寝るから」と両手を頬に当てて首を斜めにかしげるかわいい仕草をしたことを思い出した。ホステルには様々な人が来るということか。

出発時間になったので、僕はバックパックを背負い、「マンマ・ミーア」のプログラムが入っているビニール袋を左手に持った。

僕 「君に会えて良かったよ」

ミラン「気をつけて」

彼と別れの握手をした後、僕は玄関のドアの傍まで行ったが、靴が無かったので(僕は靴をロッカーに収納せずに何度かドアの近くに置いていた)、ドアを閉めてロッカーに置いてある靴を取りに行くのと、彼はそれを見て「チャーミング！」と言って爆笑した。

靴を履き、「I want to see you again, somewhere.」と言うと、彼は「In Japan!」と大きな声で言ったので、「I'll be waiting for you.」と言い、手を上げて「Bye, bye」と言ってドアを閉めた。彼とはもっと話したかったなあ。

ホステルのそばの「[Penn St駅](#)」から地下鉄でA線の急行列車に乗った。JFK空港には「[Howard Beach駅](#)」で下車してエアトレインに乗り換える。この駅に急行が止まるか隣の乗客に確認すると、途中の「[Euclid St駅](#)」からは各駅停車に切り替わるとのこと。

エアトレインに乗車すると乗客は15人程度しかいなかった。駅がターミナル別になっていて僕はDELTA航空が乗り入れている第3ターミナル駅で下車して、歩いて空港ビルに入った。



12時にチェックインを済ませて、搭乗ゲートに来ると、待合室は乗客で溢れていた。

フライトは午後2時発のDELTA173。成田まで13時間45分。到着は4月6日の午後4時45分だ。

機内に入り席に着いた。

僕の周りは若い(15、6才か)アメリカの学生の集団だった。正面の大型画面では「X-MEN」の映画を流していた。旅の疲れもあるはずだが、なぜかほとんど眠れなかった。

14時間のフライトは順調だったが結構きつかった。成田空港の滑走路に飛行機の車輪が接地すると同時に周りの学生から一斉に拍手が沸いた。それは17日間に亘った僕の旅行の幕が下ろされた瞬間でもあった。

## 12. おわりに

---

アメリカ横断旅行を終えて、今、こうして旅行記をしたためている。

帰国して「旅行はどうだった？」と訊かれる。「色々あったけど、楽しかった。行って良かったよ」と答えている。勿論、正直な気持ちだ。

ただ、この2週間余りの旅行が、今、なぜか遠い出来事のように感じている。

それは、サンフランシスコから始まったこの旅行での自分を取り巻く状況が、日々が目まぐるしく変わったことによるものなのか、それとも旅行自体が持つ非日常性という特質から来るものなのか。それは分からないが...

この旅行記の「はじめに」にも記したように、僕が旅行に求めたものは「より多くの人々との出会い、コミュニケーションを図ること」にあった。

シカゴ行きの列車では4人掛けのテーブルで5回食事したが、相席になった客は、毎回初対面の人ばかりだった。展望車にも極力長くいて、他の旅行客との交流を図った。

二日目の夕方には列車の遅延が発覚し、鉄道会社のスタッフと膝を突き合わせて話し合うという貴重な体験もした。ナイアガラではタクシーのドライバーと幸か不幸か2時間近く行動を共にした。

ホステルに移ってからは、6人部屋で6日間過ごし、各国(英・仏・蘭・豪等)からの旅行客とのコミュニケーションが図れた。道を尋ねた人は何十人いるだろうか。写真をお願いした人もいる。一日三度の食事も言葉なくしてはどうしようもない。そういう意味では、ある程度、当初の目的は達成できたのではないかと思っている。

ただ、僕がもっと英語が話せたなら(正確にはもっと相手の話す内容が聞き取れたなら)、今回の旅は何倍も深いものになったであろうと思うと残念な気がする。が、それは次回までに克服すべき課題としておこう。

今、目を閉じ、旅の場面を思い出す時、その映像に浮かんでくるのは、決して、ナイアガラの滝や自由の女神でもなければ、NYの夜景でも、ブロードウェイでもない。それはやはり、旅で出会った人たちの顔、顔、顔である。

シスコの空軍所属のダンディな紳士、列車で出会った津波の映像を見て涙したというご夫婦(らしき男女)、危機的状況を救ってくれたAmtrak社のレナード、シカゴの地下鉄で話をしたNYの大学に学ぶ日本人学生、JFK空港で僕の肩を叩いていった笑顔が魅力的な小柄な黒人、ジャパントウンの居酒屋でハグして別れたりズ。6日間泊まったホステルで談笑したマーク、ガイ、ミランなど枚挙に暇がない。

残念ながら、写真として残っているのはホステルで出会った彼ら4名だけだ。勿論、他の人達

も僕の心のアルバムに色褪せることなく、しっかりとファイルされている。

今回、無事に旅行を予定通り成し遂げられたのは、友人Kを始め、旅行中に会った数多くの人々に助けられ、親切にして貰ったことにあることは言うまでもない。ここに、改めて感謝し、この旅行記を閉じることにしよう。

これで、僕の『[バケットリスト](#)』は1項目消し込まれ、あと残り9項目となった。

完

## 付記：お金の話

今回の旅行に要した費用(食費を除いた概算・換算レート80円)をまとめてみましたので、参考にして下さい。

旅行期間 17日間

### 1.交通費

|                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 日本⇄アメリカ 往復 飛行機代    | 97,450円         |
| アムトラック列車 (食事代含む)   | 34,400円 (430ドル) |
| シカゴ→バッファロー 飛行機代    | 17,090円 (216ドル) |
| バッファロー空港→ホテル タクシー代 | 3,600円 (45ドル)   |
| ホテル→バッファロー空港 タクシー代 | 4,400円 (55ドル)   |
| バッファロー→JFK空港 飛行機代  | 9,140円 (115ドル)  |
| 地下鉄、フェリー、バス料金 概算   | 10,000円 (100ドル) |
| 計                  | 176,080円        |

### 2.宿泊費 (13泊、寝台車2泊分は除く)

|                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| サンフランシスコ ホテル      | 7,500円          |
| ナイアガラ (ホテル デイズイン) | 5,800円 (72.5ドル) |
| ナイアガラ (ホテル オークス)  | 11,360円 (142ドル) |
| ニューヨーク (友人宅 4日間)  | 0円              |
| ニューヨーク (ホステル 6日間) | 22,080円 (276ドル) |
| 計                 | 46,740円         |

### 3.遊興費

|                             |               |
|-----------------------------|---------------|
| アルカトラズ島 観光                  | 2,080円 (26ドル) |
| 「NY CITY PASS」 (自由の女神等 6ヶ所) | 5,600円 (70ドル) |
| ミュージカル (MAMMA MIA)          | 6,720円 (84ドル) |
| 計                           | 14,400円       |

総合計 237,220円

〈総括〉

・各項目については特に冗費に値する内容のものは無いが、今回、列車の遅延により、途中下車をして、飛行機に乗り換えた費用が20,000円あるが、これは除外した。

・NYの地下鉄は余り利用しないだろうと1回券(2.5ドル)を利用したが、1週間乗り放題の切符(26ドル)を買っておけばもっと安く抑えられた。

・宿泊費はなんといってもNYでの宿泊が友人宅で4泊(無料)できたことと、ホステル6泊で僅か22,000円で抑えられたことが大きい。つまり、NYに10泊して1日平均2,200円で済んだ。

・NY10日間、すべて普通のホテル(仮に1万円/泊)に泊まると10万円かかるので、旅費の総額は30万円を超えただろう。

・お金の話ではないが、日本のお土産(例えば、握り鮭のキーホルダーとかを)10個くらい持参しておけば良かったと

思う。そうすれば旅で出会った人やお世話になった人に、感謝の気持ちとして渡すことができたのに。それだけが心残りだ。

以 上

## ★★★ 突然のメール ★★★

---

アメリカ旅行から帰って来て、既に2年3ヶ月以上経った2014年6月12日。何気なくPCメールをチェックしていると差出人が外人名のメールに気付いた。差出人は「[Scott Lenard](#)」。

僕はその名前を目にして、驚くと共にすぐに一人の男性の顔が浮かんだ。彼は長距離列車ゼファー号が遅れた時に、僕を救ってくれたAmtrak社のスタッフ(法律関連部門の役員)だった。

なぜ今頃彼からメールが来たのか。一体どんな内容なのか。逸(はや)る気持ちを抑えて、そのメールを開いた。(以下、彼とやり取りをしたメールの全文を邦訳したものを紹介します)

◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆ ◆◆

'14年6月12日(木)

タイトル：『[Amtrak trip in 2012](#)』

**Dear Mr.Sato**

『今日、インターネットで調べ物をしていたら、偶然、2012年にあなたが書いた旅行ブログを見つけ、その話の中に私自身が登場していることを知りました。

あなたは列車に乗車した二日目に話をした人物を、多分覚えているでしょう。その日、我々は「運行遅延」対応業務の三日目でした。当社のスタッフと私は、あなたがシカゴからバッファロー行きの航空便に乗り遅れるのではないかと非常に心配していました。

寝台車の接客係から、あなたに遅延の状況を説明するように頼まれ、私は助けたいと思い、喜んで引き受けました。私は携帯電話で航空会社に電話し、オマハからシカゴ行の航空便を予約しました。そして、あなたはオマハで下車しました。

私はメモを書き、オマハ駅の責任者に「運行遅延」による旅費の一部をあなたに返金するよう依頼しました。あなたの旅行記を読み、あなたがオマハ駅で返金手続きをしたのか確かめようと思いました。ブログの内容からだ、返金手続きはされてないようでした。それで、今回、私はそれを確かめたくてあなたにメールしたのです。

あなたのブログによると、次のフライトがシカゴ発18:50でした。当初、列車の到着予定時刻はシカゴ着が14:50でしたが、実際には18:05に到着しました。あなたがシカゴに到着し、地下鉄「Blue Line Train」に乗車するまでに20分要し、その後、地下鉄でオヘア空港には30分要すると思われました。それだと、フライトの搭乗チェックインに遅れると思われたのです。

早朝に起きてオマハ駅で下車しなければならなかったことは、大変ご不便、ご迷惑だったことでしょう。そのことに対しお詫び致します。しかし、我々は正しい決断をしたと思っています。

今回の「運行遅延」対応業務はアイオワ州Burlingtonのミシシッピ川に架かっている、古い鉄橋を取替える為に行われたものでした。この鉄橋の所有者はBNSF鉄道会社です。そのため、我々の列車は普段は旅客を乗せない別のルートに回



されたのです。

あの日、我々は19分遅れでデンバーを発ち、オマハには35分遅れで到着しました。オマハとシカゴの間では更に遅れました。鉄橋の取替えには3日間を要しました。その後、列車は再びBurlingtonを経由しています。

もしあなたがオマハで返金を受け取っていないのであれば、今でも喜んであなたからの要求を受け付けます。もし、返金手続きがなさらなければそれは残念なことです。2年経った今でもあなたのアシスタントでありたいと思います。』

Sincerely

Scott Leorard

6月14日(土)

**Dear Mr.Lenard**

今日、私は数件のメールの中にあなたの名前を見つけ、とても驚きました。勿論、私は今でもはっきりとあなたとあの日のことを覚えています。

先ず最初に、私はあなたの助力に再度感謝しなければなりません。あなたの迅速な対応と正しい決断により、私は窮地から救われました。

あなたが仰るように、あなたの決断は正しかったと思っています。実際、私はオヘア空港では迷い、「Blue Line Train」を見つけるまでに時間を要しました。私はオヘア空港があれほど広大だとは知らなかったのです。つまり、あの出来事は私の楽観的な旅行プランに原因があったのです。私は列車の遅れに関するリスクを十分に考慮していませんでした。

それから、まだ私は返金手続きをしていません。というのは、返金額はそう多くはないと思っていたし、当時、心の余裕もありませんでした。でも、私は貴重な経験ができたし、今回の出来事を通じて良い教訓を学ぶことができました。それで私は十分なのです。その価値は返金額以上にあると思います。勿論、あなたの心遣いには感謝しています。

私は今、あなたがオマハ駅の責任者に書いたメモを見ています。このメモは実際にあなたの名刺と共に良い思い出になりました。このメモを見る度に人生の最高の旅行を思い出させてくれます。

いつかもう一度、列車でアメリカ旅行をしたいと思っています。

Sato

6月17日(火)

**Dear Mr.Sato**

あなたが2012年のアメリカ旅行に良い思い出を持っていることを知って、とても嬉しいです。

あなたの旅行プランは非常に意欲的でした。だからこそ、あなたは冒険をなしえたのです。私もまた外国旅行の経験があります。旅行者は何度か決断を迫られた時、最良の結果を期待するものなのです。

あなたの思いやりの言葉に感謝します。私はあなたが返金を期待していないことをやっと理解しました。しかし、鉄道運用上、あなたには返金を受け取る権利があり、そして、私はそれをあなたに約束しました。

今朝、あなたが列車のチケットを購入した時に使った口座に\$181を入金しました。

またあなたがアメリカに戻って来られ、わが国の多くの場所を訪れることを希望しています。

Scott Lenard

6月26日(木)

Dear Mr.Lenard

私は6月17日に返金額が口座に入金されていることを確認しました。

私は様々なことであなたに助けて頂いたことに感謝しています。2年以上経過しているにも拘わらず、あなたの職責を全うするその強い責任感に敬意を表します。

あなたに会って幸運でした。あなたの幸運を祈っています。

Sato



彼に返信したメールに書いているように、私は彼に返金の請求はしなかったのだが、彼は私の口座に列車代の40%近い額\$181を入金してくれた。二泊三日(7食)の予定で、二泊し、既に5食食べて途中下車したので、予想外の金額だった。

ただ、飛行機代\$200は自己負担したのでその点を考慮してくれたのかも知れないが...

いずれにしても、2年以上経過しており、こちら側から請求手続きもしていないのににも拘わらず、返金してくれるとは今もって信じられない。

この話を当時NYでお世話になった友人K氏にしたところ、やはり「あり得ない」との返事だった。

## ★★★突然のメール(英文編)★★★

---

### 突然のメール（英文版）

前章でMr.Lenardとのメールの邦訳を紹介したが、ここでは実際の英文メールを紹介しよう。英文で手紙を書くことは何十年振りだったが、今や英作文の情報はネットで簡単に入手でき、思ったより楽だった。ただ、私の真意が果たして正確に伝わっているか心配だが。

それにしても、手紙を書いている時間は、とても新鮮で楽しく刺激的な時間だった。

#### **Dear Mr.Sato**

While looking for something on the internet today, I happened to find your travel blog from 2012, and I recognized myself in part of the story.

Perhaps you will remember me as the person who spoke with you on the second night on the train. There was going to be a service disruption on the third day. Some of the train crew members and I were very concerned that you would miss your flight from Chicago to Buffalo. Your sleeping car attendant asked me to explain the situation to you. I was happy to try to help. I used my phone to call the airline. That company booked a flight for you from Omaha to Chicago. You got off the train in Omaha.

I wrote a note asking the station agent in Omaha to give you a partial refund because of the service disruption. I tried to understand from your travel blog whether a partial refund was processed in Omaha, as I had asked in my note. From the story, it seems perhaps that the refund was not processed, but I wanted to write to you to be sure of that.

Your travel blog says your second flight would depart Chicago at 18.50 hours. Although the train was scheduled to arrive in Chicago at 14.50, it actually arrived at 18.05. It would have taken you another 20 minutes to leave the station and find the Blue Line train. It would have taken another 30 minutes to ride to O'Hare Airport. By then it would have been too late to check in for your flight. It was a serious inconvenience for you to leave the train at Omaha at such an early hour in the morning. I apologize for that inconvenience. Still, I think we made the flight decision.

The reason for the service disruption was a project to replace an old bridge over the Mississippi River, at Burlington, Iowa. The bridge and railway at Burlington are owned by another company, BNSF Railway. Our train was sent over another route that normally has no passenger trains on it. We left Denver 19 minutes late and arrived at Omaha 35 minutes late, and had even more delays between Omaha and Chicago. The bridge replacement project took three days. After that, the train went through Burlington again.

If you did not receive a refund in Omaha, I am happy to request one now. Although it is regrettable if no refund was processed, I hope that even after two years have passed, I can still be of assistance.

Sincerely,

Scott Lenard

**Dear Mr.Lenard**

I was very surprised to find your name among a lot of emails today (jun,14).

Of course, I remember you and that day clearly even now.

First of all, I have to appreciate you for your help again. I was saved from the difficult situation by your prompt response and right decision.

As you say, I think your decision was right. Actually I got lost at the O'Hare Airport and took time to find the Blue Line train. I did not know that O'Hare Airport is so extensive. That is, the incident at that time resulted by my optimistic plan. I did not take risk(delay of train) into account sufficiently.

Well, I have not done the procedure for refund, since I thought the refund was not so much and I had no room in my heart that day. But I was able to have a valuable experience and learned a good lesson through the incident. That is enough for me. The worth is more than refund. Of course, I feel grateful for your concern.

I am looking at the note asking for the station agent in Omaha written by you now. It really became a good memory with your name card. Every time I look this note, it reminds me of the best travel in my life. I hope I can travel around by train in U.S.A again someday.

Sincerely

Sato

**Dear Mr. Sato**

I am very happy to know that you have good memories from your trip to the U.S in 2012.

Your travel plan was very ambitious, but you made a great adventure from it. I also have had the experience of traveling in another country. Sometimes a traveler must make a decision and hope for the best.

Thank you for your kind words. I realize that you are not expecting a refund, after all this time. But under railway policy, you are entitled to a partial refund, and I promised it to you. A refund was processed this morning in the amount of \$ 181.00. The refund went to the credit card you used to pay for the train tickets. It is a Visa card with an account number ending in 3232.

I also hope that someday you will return to the U.S. and I hope that you visit more places in our country.

Scott Lenard

**Dear Mr.Lenard**

I confirmed the payment \$ 181.00 in my account on June 17.

I really appreciate that you have helped me in many ways. I respect and admire the company policy and your sense of strong responsibility to perform your duties even through more than two years have passed.

I am very lucky to have met you. I wish you good luck.

Sato

アメリカ大陸横断旅行  
～列車で行くバックパッカー一人旅～

<http://p.booklog.jp/book/53101>

著者 : dfb070

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/dfb070/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53101>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53101>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ